

音羽・五条坂窯跡（浅見五郎助窯）

2018年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

音羽・五条坂窯跡（浅見五郎助窯）

2018年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、ホテル建設に伴う音羽・五条坂窯跡（浅見五郎助窯）の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

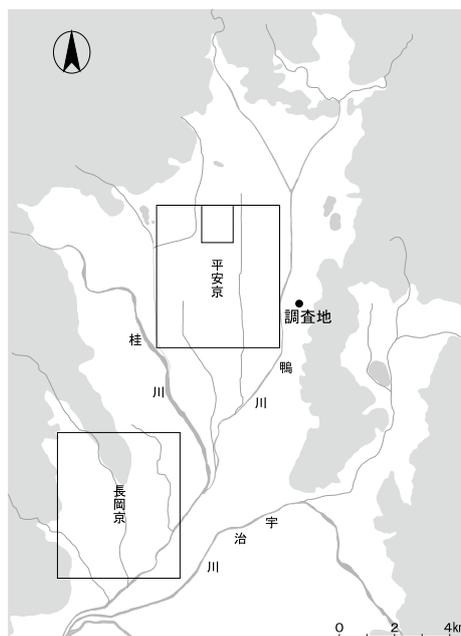
平成30年8月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- | | |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名 | 音羽・五条坂窯跡（浅見五郎助窯）（京都市番号 17 S 755） |
| 2 調査所在地 | 京都市東山区五条橋東4丁目450 |
| 3 委 託 者 | 巖本金属商事株式会社 代表取締役 巖本 賢 |
| 4 調査期間 | 2018年3月26日～2018年4月12日 |
| 5 調査面積 | 87.5㎡ |
| 6 調査担当者 | 木下保明 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「五条大橋」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 遺構番号 | 種類ごとに通し番号を付した。 |
| 12 遺物番号 | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 13 本書作成 | 木下保明 |
| 14 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。 |

（調査地点図）



目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	2
2. 位置と環境	3
3. 遺 構	4
(1) 基本層序	4
(2) 遺構の概要	4
(3) 幕末から明治時代初期の遺構	4
(4) 明治時代の遺構	4
(5) 明治時代末期から現代の遺構	5
4. 遺 物	7
(1) 遺物の概要	7
(2) 土器類	8
(3) 窯道具	11
(4) その他の遺物	13
5. ま と め	15

図 版 目 次

図版1	遺構	窯跡オルソ画像 (1 : 80)
図版2	遺構	調査区平面図 (1 : 80)
図版3	遺構	中央断割り断面図 (1 : 80)
図版4	遺構	二の間・四の間断割り断面図 (1 : 40)
図版5	遺構	調査区北半平面図 (1 : 40)
図版6	遺物	土器実測図1 (1 : 4)
図版7	遺物	土器実測図2 (1 : 4)
図版8	遺物	土器実測図3 (1 : 4)
図版9	遺物	窯道具実測図1 (1 : 4)
図版10	遺物	窯道具実測図2 (1 : 4、140・141のみ1 : 6)
図版11	遺物	その他の遺物実測図 (1 : 4)、銭貨拓影 (1 : 2)

- 図版12 遺構 1 壊される前の浅見五郎助窯（北東から）
 2 調査区全景（北から）
- 図版13 遺構 1 浅見五郎助窯基底部全景（北から）
 2 溝1検出状況（北から）
 3 溝1下部（北から）
- 図版14 遺構 1 胴木間（北から）
 2 胴木間 炎道（北から）
 3 一の間 西側壁（北東から）
 4 一の間 東側壁（北西から）
 5 二の間 東側壁（北西から）
 6 三の間 西側壁基底面（北東から）
- 図版15 遺物 土器類、窯道具1
- 図版16 遺物 窯道具2、その他の遺物

挿 図 目 次

図1	調査地位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：500）	2
図3	調査前全景（北から）	3
図4	作業風景（北から）	3
図5	鎌倉時代から室町時代の土器実測図（1：4）	8

表 目 次

表1	遺構概要表	4
表2	遺物概要表	7
表3	土器類観察表	16
表4	窯道具観察表	19
表5	その他遺物観察表	21

音羽・五条坂窯跡（浅見五郎助窯）

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

本調査は、ホテル建設に先立ち実施された家屋解体工事に伴い、2017年暮れに壊された浅見五郎助窯の旧状を記録することを目的とした発掘調査である。調査地は、東大路五条の交差点より約150m西に入った北側に位置する。周辺は「五条坂」と呼ばれ、京焼・清水焼の一大生産地である。

浅見五郎助窯は、京式登り窯の伝統を受け継いだ近・現代の産業遺産として貴重な遺構であった。そのため今回の調査では、浅見五郎助窯の残存部の検出と構築方法・窯の変遷を明らかにすることを主な目的とした。

また、調査地は平安時代後期に平氏の六波羅邸があり、平氏滅亡後鎌倉幕府により六波羅政庁が設けられた所に当たっており、関連の遺構・遺物の検出が想定された。調査を実施するにあたって、京都市文化市民局文化芸術推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）の指導を受けた。

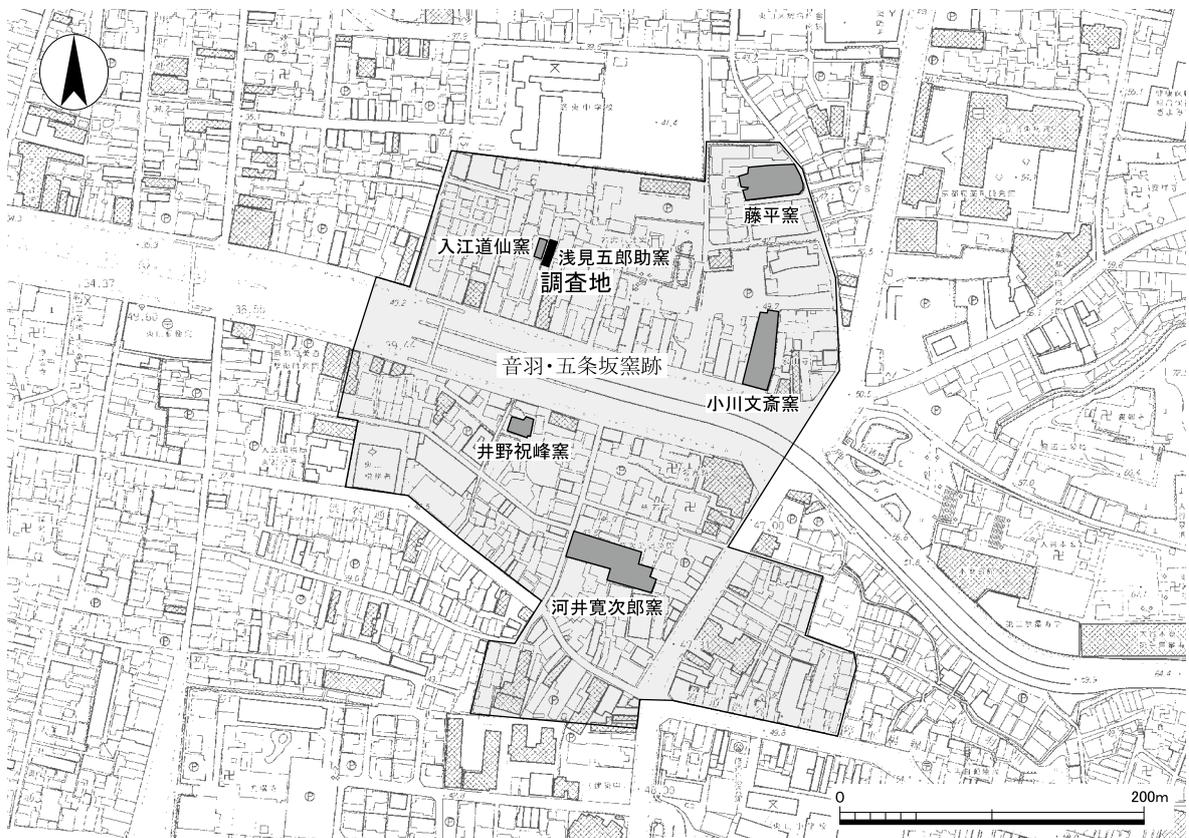


図1 調査地位置図（1：5,000）

(2) 調査の経過

調査は、壊された時に埋まった現代層を人力で撤去し、窯の残存部の検出を行った。その結果、窯は胴木間・一から三の間の基底の一部を残すのみで、四の間より上の焼成室は完全に壊れていることを確認した。また、調査区中央部を南北に重機による断割り、二の間と三の間を東西に人

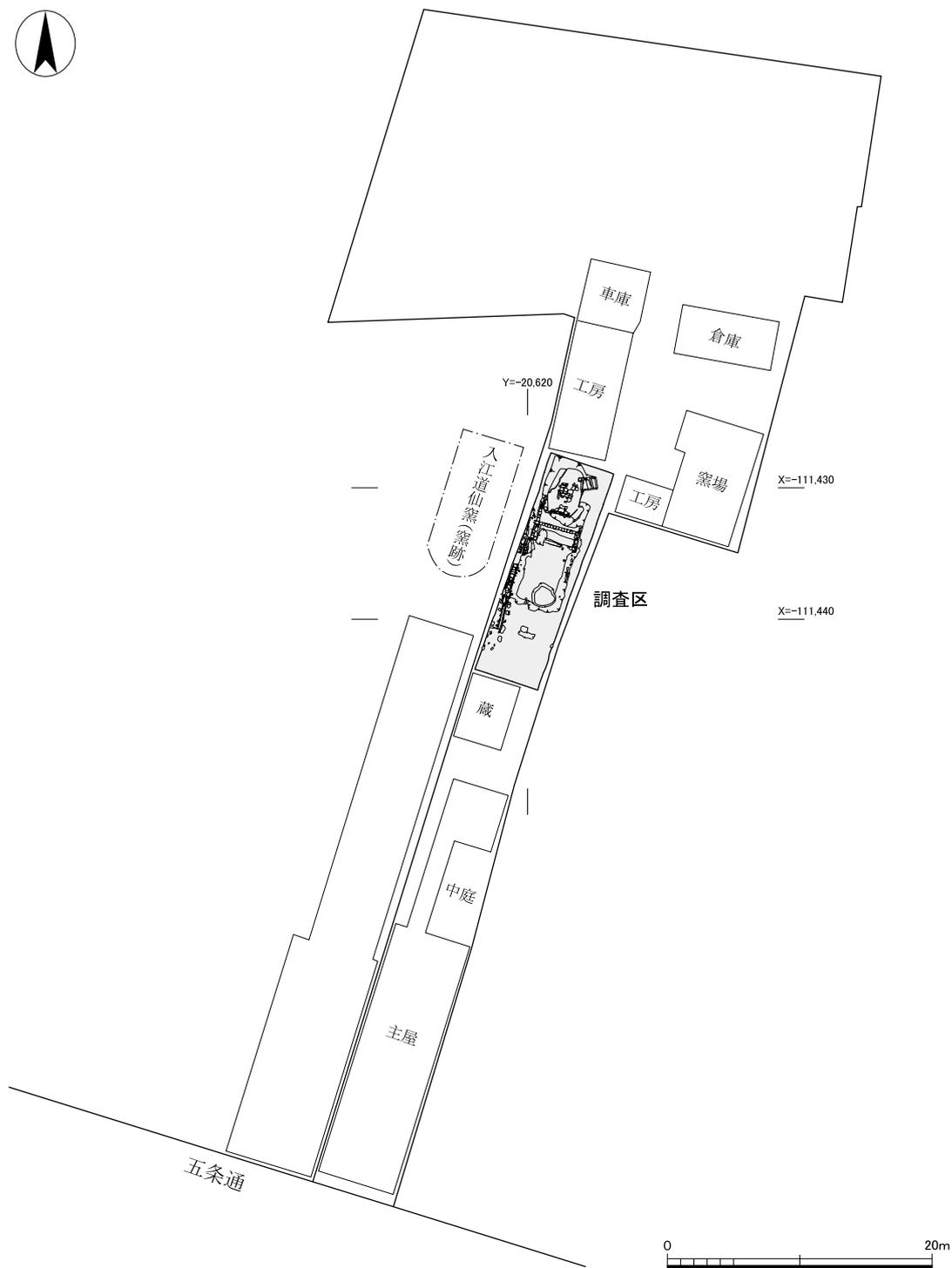


図2 調査区配置図 (1 : 500)

力によって断割りを実施して下層の観察を行った。

調査は2018年3月26日に開始し、同年4月12日に終了した。調査面積は87.5㎡である。調査中は適宜、文化財保護課の臨検を受けた。また、立命館大学の木立雅朗教授に御教示をいただいた。

2. 位置と環境

五条坂は、五条通の大和大路通から東大路通に向かう緩やかな坂道で、清水寺の参詣道として観光客で賑わっている。五条通は、現在50m幅の幹線道路であるが、これは昭和19年（1944）の強制疎開によって拡張されたものである。以前は幅6m程の道で、道の両側には陶磁器の小売店が立ち並んで殷賑を極めていた。また、西に行くと奈良へと向かう大和街道（大和大路通）、京都と伏見を繋ぐ伏見街道（本町通）と接続していた。

京焼・清水焼製造の中心地であるいわゆる五条坂で、窯業が開始されるのは寛永18年（1641）、音羽屋惣佐衛門が若宮八幡宮社の門前、音羽橋のあたりに窯を開いてからである。当初は、音羽川を挟んで窯が点在しており、製品は「音羽焼」とよばれていた。以来、五条坂では窯業が続けられ、多くの登り窯が操業していたと伝えられている。大正期には約20基の登り窯が存在していた。しかし、昭和46年（1971）に京都府公害防止条例の施行により登り窯による操業はできなくなった。

今回調査した浅見五郎助窯は、最近まで残存していた6基の京式登り窯（藤平窯・河井寛次郎窯・小川文斎窯・井野祝峰窯・入江道仙窯・浅見五郎助窯）のうちの一つであった。浅見五郎助窯は、嘉永5年（1852）に当地で操業を開始したと伝えられているが、存在を裏付ける確実な資料は存在しない。藤岡幸二編の『京焼百年の歩み』（1962年）に図示されている「明治末の五条清水附近窯要図」には、当地に隣接する道仙窯とともに浅見窯が記されているので、確実な年代はわからないが、少なくとも明治時代の末には操業を始めていたと考えられる。操業停止の時期もはっきりしないが、昭和40年前後と言われている。



図3 調査前全景（北から）



図4 作業風景（北から）

3. 遺 構

(1) 基本層序

壊される前の窯は、北側に焚口と燃焼室である胴木間を設け、南上がりの傾斜地に窯体が構築されていたが、調査時には単なる南上がりの傾斜地のみとなっていた。

基本層序は、調査区の南半部で窯の基底部と造成土が堆積し、その下に江戸時代の包含層が約0.35m、鎌倉時代から室町時代の包含層が約0.5m堆積し、地山（標高42.0m）となる。

江戸時代の包含層は、南側では1層（明灰黄色砂質土）であるが、北側では上から褐色シルト、暗褐色砂質土の2層に分かれる。鎌倉時代から室町時代の包含層は、上から褐灰色砂質土、暗褐色粘質土、黒褐色粘質土の3層に分かれる。

(2) 遺構の概要

調査の結果、浅見五郎助窯の残存部と溝1を検出した。浅見五郎助窯の胴木間とその前庭部の床面、一の間・二の間の床面・隔壁と東西側壁の基底部、三の間の東西側壁の基底部の一部を検出した。溝1は、窯の西側裾部に沿って築かれたレンガで組まれた暗渠排水溝である。また、断割り断面の観察から、幕末から明治時代初期の土坑、低湿地状の落込みを4箇所検出し、室町時代の遺物包含層と遺構面の存在を確認した。

(3) 幕末から明治時代初期の遺構（図版3）

土坑1 胴木間の前庭部の下で検出した土坑である。南側の肩は検出したが、北側は調査区外に伸びる。南北幅2.7m以上、深さ1.4mである。上層は土器類・窯道具を多量に含み、下層は植物遺体を含む還元された土壌が堆積し、湿地状を呈する。

(4) 明治時代の遺構（図版3・4）

土坑2 調査区の中央部で検出した土坑である。土坑3の廃絶後、厚さ約0.3mの土で整地される。その整地層を掘り込んで、形成されている。南北幅4.2m、西肩は検出したが、東側は調査区外に伸び、東西4.1m以上となる。深さは1.0m以上である。土坑2からは、匣鉢を含む窯道具、窯

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
幕末～明治時代初期	土坑1	
明治時代	土坑2～4	
明治時代末期～現代	浅見助五郎窯、溝1	

壁などが出土しており、付近に窯が存在していた可能性がある。

土坑3 調査区の北辺部で検出した土坑である。江戸時代の包含層を掘り込んで造られている。南側の肩部は、ほぼ垂直に立ち上がるが、北側は土坑2に掘り込まれているので、肩部の形状は不明である。南北幅4.8m以上で、底部は2段になっている。南半では深さ0.9m（標高42.0m）で底部を検出したが、北半では深さ1.1mまで掘削したが、底部は検出されなかった。土器類を多く含む層があり、窯道具はほとんど含まず、蜆の貝殻が出土していることから、日常生活で使用されていたものの廃棄土坑と考えられる。埋土から四代目清風与平の落款をもつ施釉陶器の椀が出土している。

土坑4 一の間東側で検出した土坑である。西側の肩は検出したが、東側は調査区外に伸びる。東西幅1.9m以上、深さ0.75mである。

(5) 明治時代末期から現代の遺構（図版1～5・12～14）

浅見五郎助窯 胴木間とその前庭部、一から三の間の基底部の一部を検出した。

胴木間では、胴基（奥壁）の基底部と両脇の炎道、床面を検出した。胴基は、下段の数段分しか検出していないが、天井材であるクレ（円柱形のレンガ）の木口を外にして積み重ねて構築している。胴基の両脇に設けられた、胴木間から一の間へと火炎が通じる炎道は、約40°の傾斜をもち、棚板の破片を貼り付けている。胴基の周りと焚口の内外に棚板が敷かれ、床面を形成している。胴基の周りは、地山の上に少し土を入れて棚板を敷く。焚口の内外では、土坑1を埋め戻した上面に直接棚板を敷設している。焚口外では棚板の長軸を東西に、焚口内では棚板の長軸を南北に揃えて並べている。

一の間では、東西の側壁の基底部と二の間との隔壁の基底部、床面を検出した。隔壁の基底部は一辺21cm、高さ10.5cmの方形の塼を二段積み上げたもので、上段の塼は露出し、表面に薄く粘土が塗られた後に被熱しているが、下段の塼は土に埋まり、粘土の塗られた痕跡がない。したがって、上段の塼は窯壁として機能し、下段の塼を埋めていた土層は一の間床面であると考えられる。北側部は破壊されているが、一の間内法は、南北1.25m、東西3.0mであったと思われる。

二の間では、東西の側壁の基底部、一の間・三の間との隔壁の基底部を検出した。二の間の断割り断面の観察によると、窯は本体より少し大きめに周りを掘り込んで、窯を造成している。下層は粘質の焼土層を敷き、その上が径1～2cmの小礫を含む砂質の焼土層で、その上面から東西の側壁が構築される。据えられた最下段の塼の間を黄褐色の砂質土で埋め、窯の基礎を造成している。その上の薄い2層が床面となる。一の間との隔壁は、窯の造成土を掘り込んで構築されている。二の間との隔壁は、東西側壁との接続部に、塼がそれぞれ1枚残るのみであるが、中間の塼が敷かれていた部分が被熱して赤化している。南西部に残った床面と他の検出面とは約10cmの高低差があり、もう一段塼を積み上げたところが床面になる。二の間内法は、南北1.0m、東西3.0mである。

三の間では、東側壁では最下段の塼の一部、西側壁では基底面の一部、塼が敷かれた外端部を検出した。東西とも二の間の塼の外端部と同一ライン上に並ぶ。このことから、東西の内法は3.0m

となる。西側壁の外端に沿って磚が約1.4mの長さで敷かれている。

今回検出した遺構は、平成19年と平成21年の実測調査に基づいて、一島政勝氏が作成した「浅見五郎助邸登り窯 外形図¹⁾」(以下「一島図」という)とあわせて、各室の名称を復元したものである(図版2・3)。しかし、各焼成室の位置は一島図とほぼ一致しているが、今回検出した胴木間の胴基が一島図の一の間と重なる結果となった。一島図によると胴木間の床面の長さは約0.5mであるが、検出した床面は、約1.2m離れている。また、2009年に立命館大学が調査した時の胴木間内部の写真によれば、胴基はオオゲタ(直方体の大型レンガ)を横積みにして構築されているが、今回検出した胴基は、クレの小口を前にして横積み構築されている。これらのことから考えると、調査では窯本体の変遷を実証できなかったが、検出した胴基は、一時期古い窯の胴基の可能性はある。

溝1 浅見五郎助窯の西端に沿って作られた暗渠排水溝である。窯の裾部を漆喰壁で固め、それを溝の東肩部としている。窯の後方部、ほぼ五の間と六の間の境に会所を設置し、南側は土管を敷設している。北側は長方形の磚を敷き、それを挟むようにレンガの長側面を下にして並べて溝を作り、上部を窯道具の棚板・匣鉢の蓋、井戸瓦で被覆し、隙間を漆喰で埋めている。溝の内法の幅は0.14m、高さは0.09mである。溝の底面は、南から北に傾斜している。

註

- 1) 「京式登り窯 図面集成(一島政勝氏作成)」『元藤平陶芸登り窯の歴史的価値等調査研究 報告書』
京都市 2015年

4. 遺物

(1) 遺物の概要

出土した遺物は、整理箱で23箱である。大きく浅見五郎助窯開窯以前（幕末から明治時代）のものと開窯後（明治時代末期から現代）の遺物に分かれる。大半が土器類・窯道具・埴（窯壁材・レンガ）で、瓦・鉄製品・土製品などが混じる。また、鎌倉時代から室町時代の土師器皿と瓦器羽釜、東播系須恵器鉢、輸入青磁などがある。

浅見五郎助窯開窯以前の遺物は、土坑・包含層から出土している。遺物の内容は土師器（皿）、土師質土器（椀・皿・急須・土瓶・行平鍋・鍋・壺・蓋）、施釉陶器（椀・皿・鉢・土瓶・急須・蓋・平仄・灯明受皿）、軟質施釉陶器（皿）、染付（椀・皿）、磁器（椀）、焼締陶器（信楽甕・播鉢）、窯道具（匣鉢・トチン・ハリなど）、窯壁材として使われた埴、土製品（土人形・土型・泥面子）、銭貨（寛永通寶）、金属製品（鋏・釘・銅線）、骨製品（柄？）、棧瓦などがある。施釉陶器には、「帯山」・「晴雲山」・「障山」・「清風」・「清山」と刻印したのものがある。特筆すべき遺物として、陶器の内側に漆を塗ったいわゆる「陶胎漆器」がある。

浅見五郎助窯開窯後の遺物は、おもに窯を壊して胴木間とその前庭部を埋めた土から出土している。遺物の内容は土師質土器（椀・皿・急須・土瓶・行平鍋・鍋・壺・蓋）、施釉陶器（椀・皿・鉢・土瓶・急須・蓋）、染付（椀・皿）、磁器（椀）、窯道具（匣鉢・トチン・ハリなど）、窯壁材として使われた埴、土製品（土人形・土型・ボタン）、棧瓦などがある。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
鎌倉時代～室町時代	土師器、須恵器、瓦器、輸入青磁		土師器1点、須恵器1点、瓦器1点		
幕末～明治時代初期	土師器、土師質土器、施釉陶器、染付、窯道具、瓦、土製品、金属製品、銭貨		土師器1点、土師質土器4点、施釉陶器5点、染付1点、窯道具15点、土製品1点、金属製品1点、銭貨2点		
明治時代	土師器、土師質土器、施釉陶器、軟質施釉陶器、陶胎漆器、染付、磁器、焼締陶器、窯道具、埴、瓦、土製品、金属製品、骨製品		土師器3点、土師質土器6点、軟質施釉陶器2点、施釉陶器34点、陶胎漆器3点、染付2点、磁器2点、焼締陶器2点、窯道具11点、土製品6点、金属製品2点、骨製品1点		
明治時代末期～現代	土師質土器、施釉陶器、染付、磁器、窯道具、埴、瓦、土製品		土師質土器4点、施釉陶器12点、染付4点、磁器1点、窯道具26点、土製品13点		
合計		35箱	167点（12箱）	0箱	23箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より12箱多くなっている。

(2) 土器類 (図版6～8・15、図5、表3)

鎌倉時代から室町時代の土器類 (図5 1～3)

1は白色系の土師器の皿で、口縁部と内面はヨコナデ調整を施す。中世の包含層から出土している。

2は瓦器の羽釜で、小片のため口径は復元できない。内面は刷毛調整を施す。土坑4から出土。

3は東播系須恵器の鉢で、内外面に回転を利用したナデ調整を施す。窯の造築土から出土している。

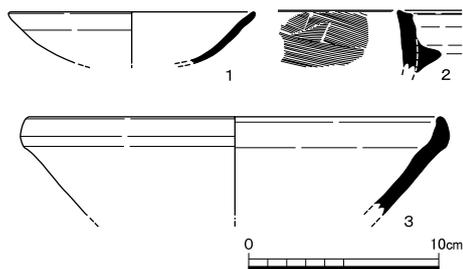


図5 鎌倉時代から室町時代の土器実測図 (1:4)

幕末から明治時代の土器類

土坑1出土土器 (図版6・15 4～14) 4は土師器の皿である。丸味をおびた底部から口縁部が外上方にのびる。内面、底部内面と口縁部の境に圏線がめぐる。口縁部・内面はヨコナデ、口縁部下半は指オサエ、底部内面は仕上げナデをする。

5～8は土師質土器で、施釉する前の施釉陶器の素地である。5・6は灯明皿で、5は口縁部に泥面子と同じ意匠をもつものを貼り付けている。6は内面に格子文を線刻している。7は灯明受皿である。内面に受部が環状にめぐり、一部が逆台形に削り取られている。いずれもロクロ成形の後、体部・底部の外面に回転ヘラケズリを施す。8は水滴で、型抜きで成形されている。

9～13は施釉陶器である。9は灯明皿で、5と同形の施釉後の製品である。10は灯明受皿で、7と同形の施釉後の製品である。11は土瓶である。球形に近い体部をもち、面取りしたS字状の注ぎ口と山形の吊手の受部をもつ。底部外面をのぞいて灰白色の釉がかかり、鉄釉と呉須で体部上面に文様を描く。ロクロ成形の後、体部下半・底部に回転ヘラケズリを施す。12は皿もしくは蓋になると思われる。ロクロ成形で、底面は回転ヘラケズリを施す。13は五輪花の皿で、内面に錆釉で文様を描く。底部内面に目跡が3箇所残る。

14は染付の蓋である。外面に唐子を描く。

土坑2出土土器 (図版6・15 15～29) 15～17は土師器の皿である。15は底部が丸みをおびる径8cmの皿で、口縁端部にススが付着する。16・17は内面に圏線がめぐる皿で、口縁端部にススが付着する。いずれも口縁部はヨコナデ、底部内面は仕上げナデをする。

18～20は土師質土器である。18は焼塩壺で、体部は直立し、口縁部はすぼまる。口縁部はヨコナデ、体部は縦方向にナデで面取りをしている。19は炮烙で、平坦な底部から少し内湾して、口縁部はほぼ垂直にたちあがる。口縁端部は丸くなる。ヨコナデの後、体部下半はヘラケズリを施す。20は施釉陶器の鍋の素地である。底部に3箇所小型の脚が付く。ロクロ成形の後、体部・底部に回転ヘラケズリを施す。

21は軟質施釉陶器の灯明皿である。底部内面と口縁部の境に圏線がめぐる。内面に3箇所ピンが貼り付けられている。口縁部・内面はヨコナデを施す。口縁端部にススが付着している。

22～27は施釉陶器である。22は灯明受皿で、内面に受部が環状にめぐり、一部が逆台形に削り

取られている。23は鉄釉の小型の椀、24は丸椀で、鉄釉で絵を描いている。いずれもロクロ成形で、高台を削り出している。25は小型の花瓶である。口縁はラッパ状に開き、体部中央に凸帯がめぐる。ロクロ成形で、底部に回転糸切り痕が残る。26は鉄釉の柄杓で、体部内面に1条の沈線がめぐる。27は鉢で、体部は直立し、口縁部は内側にほぼ直角に折れ曲がる。ロクロ成形の後、体部と底部の境に回転ヘラケズリを施す。

28は焼締陶器の信楽系の播鉢である。11条1単位の播目を放射線状に入れる。

29は磁器の上絵付の仏飯器である。赤絵と銅緑釉で草花文を描く。

土坑3出土土器(図版7・8 30～60) 30・31は土師質土器の椀で、施釉する前の施釉陶器の素地である。高台を削り出している。高台内に、30は小判形の中に「晴雲山」、31は丸の中に同じく「晴雲山」の刻印がある。「晴雲山」の刻印は作者が不明であるが、明治初年頃に焼かれた清水焼のものである。32は土師質土器の焜炉のスノコで、皿形をしている。中央に3箇所、周縁に8箇所、全部で11箇所の円形の孔を開けている。ヨコナデ調整を施す。

33は軟質施釉陶器の皿である。型抜き成形で、外面は花卉を表す。内面はナデ調整、口縁端部はヘラケズリを施す。

34～48は施釉陶器である。34～36は椀である。34はいわゆる小型の杉形椀^{すぎなり}である。35は筒形椀で、全体を竹に見立て、節からのびる葉を描く。36は体部下半が外側に開き、中位で直立し口縁部に至る。底部内面に目跡が3箇所残る。37は蓋物の身である。体部は直立し、口縁端部は内側に直角に折れ曲がる。底部内面に3箇所目跡が残る。ロクロ成形で、底部は回転ヘラケズリを施す。口縁端部と底部は無釉である。白泥と鉄釉で梅花を描く。38・39は鉢である。38は6弁の輪花の鉢で、鉄釉と呉須で丸文・松葉・格子文などを描く。内外面に重ね焼きによる付着痕が残る。縦方向に1条の、焼成時の亀裂がはいる。高台内には三代目清風与平の落款である、丸の中に「清山」の刻印がある。39は口縁端部に鉄釉を塗った「口紅」と呼ばれるもので、内外面に鉄釉と白泥で花と葉を描く。底部内面に目跡が3箇所残る。高台内には四代目清風与平の落款である、丸の中に「清風」の刻印がある。40は壁掛けの一輪挿し、または小鳥の餌・水を入れるための容器と考えられるものである。断面六角形の体部の前面に張出しが付き、下部は失われているが、さらに張り出し袋状になると思われる。体部前面の最下端に方形の孔が開いている。体部背面は本体より上にのび、釘掛け用の孔が開けられている。体部の上面に一角獣が貼り付けられている。表面に緑色の釉の上に暗緑色の釉が斑状にかけられている。型作り成形である。41は茶道で貴人台と呼ばれる茶托である。広口壺に鏝が付く形態で、鏝の上面に鉄釉で樹木と飛鳥^{ひちょう}が描かれる。42は灯明皿で、内面に4条の沈線が直線的にはいる。内外面にそれぞれ3箇所の目跡が残る。43・44は内部に環状の受部をもつ灯明受皿である。45は携帯用燈火具のカンテラである。灯芯を通す張り出した口と携帯用の把手が付く。46・47は急須の蓋である。46は上面に蠟抜きで描かれた唐草文の地(明緑色の釉がかかる)に金彩を塗布している。47は上面に鉄釉を施釉するが、下面は無釉である。48は仏飯器で、内面に錆釉で笹を描く。下端部は回転糸切り痕が残る。

49～51は陶胎漆器である。49は箱形の酒器もしくは急須で、六つパートを型作り成形し、あと

で繋ぎ合わせて完成させている。天井部の中央に円形の孔が開けられ、蓋受も設けられている。天井部の前後に山形の吊手の受部をもつ。底部を除く5面に型押しでつけられた山水樓閣文があり、下地に黒漆、仕上げに朱漆を塗っている。底部外面には茶色の漆が塗られる。50は皿で、薄く塗った化粧土の上に朱漆を塗り、銀彩で文様を描く。51は鉢で、内面全体に朱漆が塗られている。陶器に直接漆を塗るのではなく、まず陶器の表面に下地の化粧土を塗ってから朱漆を塗っている。漆の剥落を防ぐための工夫と考えられる。金彩と黒色の顔料で花卉を描いている。

52～56は鉄釉の施釉陶器である。52～54は仏花瓶である。平底で扁平な球形の胴部から、ほぼ直線的に頸部がのび、口縁部はラッパ状に開き、口縁端部は上下に突出する。53・54には、頸部の中位に獣面の把手が付く。53の底部には記号が墨書されている。55は徳利である。56は鍋で、口縁部に2箇所把手、底部に3箇所小型の脚が付く。ロクロ成形の後、体部・底部に回転ヘラケズリを施す。底部内面に目跡が5箇所残る。底部にススが付着している。

57・58は染付である。57は蓋で、外面に花卉を描く。58は小型の長頸壺で、草を描く。

59は青磁の椀である。高台端部は無釉である。

60は焼締陶器で、備前の布袋徳利と呼ばれるものである。胴部を均等に3箇所指で押さえて凹まし、1箇所に布袋の像を貼り付けている。底部外面には菱形の中に「上」の刻印がある。

土坑4出土土器（図版8 61～68）61～68はすべて施釉陶器である。61は小型の丸椀で、外面に錆釉と呉須で朝顔を描く。62は上絵付の丸椀で、外面に青・赤・緑彩で水仙を描く。63は平椀である。64は上絵付の筒形椀で、外面に赤・緑彩で水仙を描く。65は椀で、丸みをもった体部から口縁が内にすぼまって上方にのびる。外面は鉄釉を塗ったのちに、その上に盛り上げ気味に鉄釉で草葉の絵を描き、さらにその上に暗青灰色の釉を垂れ掛けて焼成している。高台内には「帯山」の刻印がある。帯山与兵衛の刻印と思われる。66は鉢で、平坦な底部から体部・口縁部が直立する。底部に扁平な高台が付く。型作り成形で、梅花と梅の枝を貼り付ける。梅花には長石釉、梅の枝には鉄釉をかけている。胎土中に大粒の長石が多く含まれる。67は小型の花瓶である。68は仏飯器である。椀形の皿部にラッパ状に開く脚が付く。

明治時代末期から現代の土器類

現代層出土土器（図版8 69～89）現代層出土土器は、窯が壊された時に胴木間を埋めた土や窯跡の上を整地した土から出土したものである。69～72は土師質土器で、69～71は施釉する前の施釉陶器の素地である。69は小型の椀の底部で、高台内には「古曾部」の刻印がある。撰津（現高槻市）古曾部で焼かれていた古曾部焼の刻印である可能性が考えられる。70は手捏成形の椀である。体部に草花文をヘラ描きで施文し、高台内にヘラで「安」と書いている。71は杉形椀である。ロクロ成形ののち、体部・高台部に回転ヘラケズリを施す。高台内には「五郎介」の刻印がある。72はいわゆる御神酒徳利である。体部上半は球形で、下半は裾広がりになる。細くて短い直立した頸部をもつ。ロクロ成形ののち、高台を削り出している。

73～84は施釉陶器である。73は猪口で、体部下半をヘラケズリによって九面に面取りしている。高台内面をヘラケズリしている。外面には呉須で3箇所、丸の中に「壽」の変形文字を描く。74は

三島手の猪口である。高台内には小判形の中に「五郎介」の刻印がある。75は碁笥底の椀で、口縁端部に鉄釉を塗る。底部内面はイチチンで三つ巴を描き、中を鉄釉で埋める。口縁部の外面には上に幅約6mm、下に約1mm、体部の外面に上約1mm、下に幅6mmの圏線を鉄釉で描き、太い方の圏線の上にイチチンで豆粒状の点を貼付している。太い圏線の上に貼付された点は太鼓の胴に皮を止めた鋏を表し、全体で太鼓を模していると思われる。高台内には「五郎介」の刻印がある。76は丸椀で、体部下半をヘラケズリによって九面に面取りしている。高台内をヘラケズリしている。外面には呉須で3箇所、丸の中に「壽」の変形文字を描く。高台内には五角形の中に「五郎介」の刻印がある。77は体部・口縁部が外上方にのびる椀である。内外面に白い化粧土を刷毛で塗っている。高台内には五角形の中に「祥瑞五郎介」の刻印がある。78は高く太い高台をもち、体部・口縁部が外湾気味に上方にのびる椀である。高台内には五角形の中に「五郎介」の刻印がある。79は皿で、高台下半と高台内部は無釉である。体部下半をヘラケズリによって九面に面取りしている。高台内をヘラケズリしている。外面に呉須で3箇所、丸の中に「壽」の変形文字を描く。80は平高台の小型の椀である。内外面に白い化粧土を刷毛で塗っている。高台に糸切り痕が残る。81は体部・口縁部が外上方にのびる小型の椀である。高台内に「暁山」の刻印がある。82は壺の高台である。表面に白色の象嵌で雲文が描かれる。高台内には丸の中に「亀水」の刻印がある。83は急須の蓋で、柱状のツマミが付く。84は蓋で、ツマミに4箇所の切込みがある。白泥を刷毛塗りしている。内面に鉄釉で「五郎介作」と書かれている。刻印はないが、73・79と調整技法・文様が同じなので「五郎介」の作品と思われる。

85～88は染付である。85～87は小型の椀である。85は底部内面に十字花、外面は高台を中心に花卉が、口縁外面に四方襷文が描かれる。86は外面に鳳凰と桐が、口縁部に四方襷文が描かれる。高台端部は無釉である。高台内に「洛東鳳瑞」と書かれる。87は外面に獅子と唐草、口縁部に菱繋ぎ文と渦文を描く。高台内に「直阿製也」と書かれる。88は急須の蓋で、宝朱形のツマミが付く。上面に草花文などを描く。内面に「洛東鳳瑞」と書かれる。

89は機械栓と呼ばれる磁器製の瓶の蓋である。側面に針金を通す孔が開いている。

(3) 窯道具 (図版9・10・15・16、表4)

匣鉢 (図版9・15 90～100・104～108) 90は丸形平底孔開きの匣鉢で、口縁端部に円錐ピンの跡が複数残る。ロクロ成形で、口縁端部は水平で内外に突出する。91・92は器壁が厚い丸形平底の匣鉢である。底部を粘土板で成形し、底部を囲むように体部を接合している。体部は回転を利用したナデ調整、底部内面はナデ調整を施す。底部外面は無調整である。口縁端部に白泥を塗る。91は口縁部に半円形の空気穴をもつ。体部外面に刻印がある。92は器壁を切り取って窓をつけて、体部にヘラで「一十」と刻まれている。93は器壁の厚い隅丸角形平底の匣鉢で、半円形の空気穴を長側面に各1箇所もつ。底部内面と口縁部の一部に白泥を塗る。体部はヨコナデ調整、底部外面は無調整である。94～100は器壁の薄い丸形の匣鉢である。94～97は丸形平底の匣鉢である。94は底部外面に糸切り痕が残る。底部外面に輪トチンが付着している。95は山形の下に「五」と鉄釉で記

す。底部内面・体部は回転を利用したナデ調整、底部外面はヘラケズリを施す。底部外面にトチンが付着する。96は体部に5条の沈線がめぐる。底部内面・体部は回転を利用したナデ調整、底部外面は無調整である。底部外面に目跡が5箇所残る。97は底部に断面台形の孔が復元で13箇所開くものである。口縁端部、孔の周りに白泥を塗る。機械栓を焼くための匣鉢である。98・99は丸形丸底の匣鉢である。体部に4条の沈線がめぐる。突出した丸底の外面に布目痕と布の絞痕が認められる。体部・内面は回転を利用したナデ調整を施す。型押し成形の後、回転ナデ調整したものである。外面に鉄釉で98は「アサミ」、99は山形の下に「政」と記す。100は角形平底の匣鉢である。型成形で、底部内面に円形の型痕跡2箇所残る。底部外面はヘラケズリ、他はナデ調整を施す。小口に1箇所径5mmの円孔を開ける。長側部に鉄釉で「あさみ」と記す。

104～108は器壁が厚い丸形平底の匣鉢に付された刻印とヘラ書きである。104は丸の中に不明文字、105は○を1つ、106は○を2つ、107は○を4つ刻印。108は「イ」とヘラ書き。

90～93・104～108は浅見五郎助窯開窯以前、94～100は開窯後の遺物である。

匣鉢蓋 (図版9・15 101～103) 丸形匣鉢の蓋である。101は笠形の蓋で、天井部に孔が開く。ロクロ成形で、天井部は回転ヘラケズリを施す。102は小型の円形の蓋で、「キテ」とヘラ書きされている。103は上面の中央がやや窪んだ円形の蓋である。上面は被熱しており、円盤状ハマが2枚付着している。102・103は浅見五郎助窯開窯以前の遺物、101は開窯後のものである。

円盤状ハマ (図版10・16 109～118) 109～111は浅見五郎助窯開窯以前のものである。型作り成形で、上下両面にハケ調整を施す。110と111の上面には3箇所の円錐ピン痕跡が認められる。112～118は浅見五郎助窯開窯後のものである。112～114は土製の薄いものである。113・114の上面には重ね焼きの痕跡が認められる。115～118は、はさみ皿と呼ばれるロクロ成形の磁器製のものである。115・116は笠形、117は扁平な算盤玉の形をし、上下に削り込みを入れる。

輪トチン (図版10・16 119～127) 119～124は浅見五郎助窯開窯以前のもので、手捏成形である。119～121は通常の輪トチンで大(121)、中(120)、小(119)がある。122は扁平な輪トチンで、上面に高台をのせた痕跡が認められる。123は太めのものである。124は輪トチンを2段に重ねたもので、上に器物をのせた痕跡が認められる。125～127は開窯後のものである。125は磁器製で、ロクロ成形である。126・127は手捏成形で、126は楕円形である。127は器高が高く高台をのせた痕跡が認められる。

その他の形状のトチン (図版10・16 128～131) 128は筒形のトチンである。回転を利用したナデ調整を施す。129～131は脚状の手捏成形のトチンである。

耐火度試験道具 (図版10・16 132) 132は磁器のツメ(ゼーゲルコーン)を土で包んだものである。焼成時の窯内の温度を調べるための道具である。

円錐ピン (図版10 133～135) 手捏成形の円錐形のピンで、大(135)、中(134)、小(133)がある。

ツク (図版10 136・137) 窯内の棚板を積み上げるときに用いる円柱状の支柱である。136は小型で、端面に白泥が付着している。137の側面には丸の中に「ツ」の刻印がある。

クレ（図版10 138・139）京式登り窯に使用される天井構築材である。138は円柱状で、上下3段の斜めの切込みを3箇所いれている。一端面は被熱して表面がガラス化しているが、他端面は被熱の影響は少ない。被熱の影響が少ない端面に糸切り痕が残り、円柱状の粘土塊を糸で切り離して成形していると思われる。また、側面に縦方向のハケ調整を施している。139は三角柱状で、両端面が被熱している。側面も被熱し、表面全体が剥離している。

棚板（図版10・15 140）胴木間の床面に再利用されていた棚板である。円盤状ハマ、輪トチンなど重なって貼り付いており、何度も使用されたものと思われる。被熱して赤色化した箇所が認められる。

錦窯（図版10・15 141）錦窯の内窯である。体部に径1.3cm前後の孔が、上下3段に開けられている。横方向の間隔は約8.5cm、縦方向の間隔は上より約4cm、約6cmである。内面は板状の工具で斜め方向にケズリを施す。

（4）その他の遺物（図版11・16、表5）

その他遺物には、土製品、金属製品、骨製品、瓦類などがある。土製品には土型、人形、ミニチュア製品、服飾品など多種多様なものがある。磁器、施釉陶器も含まれるが、土製品としてこの項で取り扱うものとする。

土製品（図版11・16 142～161）142～145は土型である。142は泥面子の抜き型で、図柄は渦巻文である。143は手捏ね成形であるが、何を作ったかは不明である。144は合子の蓋の土型と考えられる。手捏ね成形である。145土人形の土型で、亀の甲羅の部分である。

146・147は土人形である。146は施釉陶器の馬の人形で、鞍・障泥・腹帯・胸繫・尻繫・杏葉が表現されている。黄・緑・茶・黒色で着色している。鞍の部分は孔が開いており、上に人物などをはめ込めるようになっている。型作りである。147は鳩である。型作りで体部は中空である。外面を赤で、首の一部を黒色で着色する。

148～150はミニチュア製品である。148は瓢箪である。型作りで体部は中空である。149は施釉陶器の播鉢である。口縁部・内面はヨコナデ調整、外面は回転ヘラケズリを施す。内面に4条1単位の播り目を14箇所つける。底部内面には4条1単位の播り目を交叉させてひく。体部下半に「障山」の刻印がある。小鳥の餌を作るための容器とも考えられる。150は箱庭道具で、家屋が表されている。黄色・茶色・緑色で着色している。裏面に「あ□…」と書かれている。「あさみ」と書かれている可能性がある。

151～153は仕上がり時の釉薬の色を見るためのテストピースである。151は器形不明の底部である。上部に孔を開け、引掛けて窯から引き出せるようしている。外面に「五条坂」、内面に「京ト市」と呉須で書かれている。152は合子の身の底部に孔を開けている。外面に格子文などの文様を描く。153は側面に鉄釉で「並石含メ二百□ヲ四分入ル」と書かれている。

154は施釉陶器の鉢の底部を四角く削り取ったものである。上面にピンが2箇所残る。台として使用されたものと思われる。内面にハート形の刻印がある。

155は施釉陶器の電熱器の皿で、上面に円盤状ハマが貼り付いている。156は磁器製の大型の乳棒で、先端の丸い部分は無釉である。隣接する入江道仙窯の製品と考えられる。

157は磁器製の第24回全国中等学校野球大会の参加記念メダルである。表面中央に野球帽を被り、右手にボールをもち、左手にグローブをはめた天使が描かれ、その右側に戦闘機が描かれる。裏面左側に野球塔、右に旭日の上に「参加章」、周縁に「第廿四回全国中等学校優勝野球大会 朝日新聞社 二千五百九十八年」と書かれている。二千五百九十八年は皇紀のことで、昭和13年(1938)にあたる。型作り成形で、表面と側面には白色の釉がかかるが、裏面は無釉である。

158・159は施釉陶器の陶板である。型作りで、裏面に布目痕が残る。158は緑彩と赤絵で、竹・菊・鳥などを描く。裏面には小判形の中に「五郎介」の刻印がある。159は黄・緑彩と赤絵で花文を幾何学的に配置して描いている。

160は土師質のボタンで、施釉する前の素地である。

161は磁器製の表面が盛り上った楕円形で、表面にエメラルドグリーンの釉がかかるものである。ペンダントなどの装飾品として使用されたものと思われる。裏面に「五郎介」の刻印がある。

金属製品 (図版11・16 162～166) 162は銅製の筭で、一部に鍍金の跡が残る。飾りの部分に花柄が彫刻されている。163は銅線で作られた小型の急須などの吊手で、両端は折り曲げて受部に引掛けられるようにしている。164は鉄製の縦長の鋏である。刃先左右が丸く磨滅するが、右の方の磨滅が激しい。

165・166は寛永通寶で、164の裏側には「元」の文字があり、両面に鍍金の痕跡が認められる。上棟銭として使用されたものと思われる。

骨製品 (図版11・16 167) 円錐形をしたもので、約1.7cmの挟りが入る。用途は不明であるが、刀子などの柄の可能性も考えられる。

5. まとめ

今回の調査により、調査地の変遷を解明することができた。地山面（標高42.0m）の上に鎌倉時代から室町時代の遺物包含層と遺構面の存在を確認した。包含層は3層に分かれ、各上面で遺構が検出される可能性が考えられる。地山面でも遺構を検出しており、時期は不明であるが、六波羅政庁跡関連の遺構の可能性もある。鎌倉時代から室町時代の包含層の上に江戸時代の包含層が約0.4m堆積している。江戸時代の包含層を掘り込んだ土坑3を検出した。土坑3から土器類を含む多くの遺物が出土している。窯道具はほとんど含まず、蜆の貝殻が出土していることから日常生活で使用されていた物の廃棄土坑と考えられる。また、土坑3が廃絶後、厚さ約0.5mの土で整地が行われる。その整地土を掘り込んだ土坑2を検出した。土坑2からは、匣鉢を含む窯道具、窯壁などが出土しており、付近に窯が存在していた可能性がある。土坑3の埋土から三代目清風与平の刻印が入った鉢（38）と四代目清風与平の刻印が入った鉢（39）が出土している。三代目清風与平（1851～1914年）が独自に窯を持つのは、明治31年（1898）で、それ以前は借り窯をしていた。

また、藤岡幸二編の『京焼百年の歩み』（1962年）に図示されている明治末の窯要図には、当地に隣接する入江道仙窯とともに浅見窯が記されている。入江家が現在地に土地を購入したのは明治26年（1893）で、隣接する入江道仙窯はそれ以降の築造と考えられる。浅見五郎助窯と入江道仙窯は規模と構造が類似し、焚口の方向を逆に築造していることなどから、計画的にはほぼ同時期に作られたと可能性が高い。これらのことから、浅見五郎助窯は明治20年代から明治31年の間に築窯されたのではないかと考えられる。

また、検出した胴木間は、壊された浅見五郎助窯の胴木間とは位置がずれ、窯の内側（一の間の下部）に入り込む。したがって、検出した胴木間は一時期古く、築窯後浅見五郎助窯は一度作り直された可能性が考えられる。

参考文献

- 1 藤岡幸二編『京焼百年の歩み』京都陶磁器協会 1962年
- 2 陶器全集刊行会『日本古陶銘款集 京都・補遺篇』平安堂書店 1973年
- 3 黒田和哉『茶碗 窯別銘款』株式会社グラフィック社 1999年
- 4 立命館大学21世紀COE 京都アート・エンタテインメント創成研究、近世京都手工業生産プロジェクト『京焼と登り窯－伝統工芸を支えてきたもの－』 2006年
- 5 立命館大学文学部考古学コース、立命館大学21世紀COE 京都アート・エンタテインメント創成研究『道仙化学製陶所跡－知られざる京焼・科学陶器窯跡の発掘調査－』 2006年
- 6 米田浩之・木立雅朗「道仙化学製陶所窯跡第5次発掘調査成果報告」『立命館文学』627号 2012年
- 7 『元藤平陶芸登り窯の歴史的価値等調査研究 報告書』京都市 2015年
- 8 木立雅朗「京都の土と窯－発掘現場からみた伝統工芸と京都の土と石の関係－」『立命館文学』649号 2017年

表3 土器観察表

番号	器種	器形	遺構・層名	法量(cm)			胎土の色調	釉の色調	備考
				口径	高さ	底径			
1	土師器	皿	中世遺物包含層	6.7			灰白色		
2	瓦器	羽釜	土坑4		(3.3)		灰色		
3	須恵器	鉢	一の間窯造築土	21.6	(5.3)		にぶい黄橙色		東播系
4	土師器	皿	土坑1	(8.6)	1.3		浅黄橙色		
5	土師質土器	灯明皿	土坑1	11.8	2.9	5.4	灰白色		施釉陶器の素地
6	土師質土器	灯明皿	土坑1	12.4	2.5	5.4	浅黄橙色		施釉陶器の素地
7	土師質土器	灯明受皿	土坑1	12.2	2.6	5.5	浅黄橙色		施釉陶器の素地
8	土師質土器	水滴	土坑1	幅 6.8	2.3	厚さ 4.3	浅黄橙色		施釉陶器の素地
9	施釉陶器	灯明皿	土坑1	11.3	2.1	4.8	灰白色	灰白色	
10	施釉陶器	灯明受皿	土坑1	11.0	2.0	5.4	灰黄色	灰白色	
11	施釉陶器	土瓶	土坑1	9.4	12.2	7.4	灰白色	灰白色	
12	施釉陶器	蓋	土坑1	4.6	1.1	4.6	にぶい黄橙色		
13	施釉陶器	皿	土坑1	9.3	2.4	4.0	灰白色	暗灰黄色	
14	染付	蓋	土坑1	9.3	2.7	4.0	灰白色		
15	土師器	皿	土坑2	7.8	1.7		にぶい橙色		灯明皿
16	土師器	皿	土坑2	10.0	1.9		灰白色		灯明皿
17	土師器	皿	土坑2	11.0	2.3		浅黄橙色		灯明皿
18	土師質土器	焼塩壺	土坑2	4.7	8.4	4.1	橙色		
19	土師質土器	炮烙	土坑2	21.0	4.9	18.6	灰白色		
20	土師質土器	鍋	土坑2	20.9	10.5	9.4	にぶい橙色		施釉陶器の素地
21	軟質 施釉陶器	灯明皿	土坑2	10.8	1.9		にぶい橙色	橙色	
22	施釉陶器	灯明受皿	土坑2	7.9	1.4	3.9	灰黄色	灰白色	
23	施釉陶器	椀	土坑2	7.0	4.0	3.6	灰白色	黒色	鉄釉
24	施釉陶器	椀	土坑2	10.7	6.1	4.3	浅黄橙色	灰白色	
25	施釉陶器	花瓶	土坑2	5.5	4.7	3.5	灰白色	灰黄色	
26	施釉陶器	柄杓	土坑2	8.7	5.7	2.9	灰白色	褐色	鉄釉
27	施釉陶器	鉢	土坑2	23.8	18.5	26.0	灰白色	灰白色	
28	焼締陶器	播鉢	土坑2	31.6	12.6	13.8	暗赤褐色		信楽
29	磁器	仏飯器	土坑2	6.3	6.0	4.1	灰白色		上絵付
30	土師質土器	椀	土坑3		(1.1)	4.3	黄灰色		施釉陶器の素地、 小判形の中に「晴雲山」の刻印
31	土師質土器	椀	土坑3		(1.4)	7.7	灰白色		施釉陶器の素地、 丸の中に「晴雲山」の刻印
32	土師質土器	焜炉のスノコ	土坑3	6.6	1.7		灰白色		
33	軟質 施釉陶器	皿	土坑3	6.9	1.6	4.0	にぶい橙色	橙色	型抜き成形

番号	器種	器形	遺構・層名	法量(cm)			胎土の色調	釉の色調	備考
				口径	高さ	底径			
34	施釉陶器	椀	土坑3	7.7	5.7	3.5	にぶい橙色	にぶい赤褐色	
35	施釉陶器	椀	土坑3	8.2	6.5	5.7	灰白色	灰オリーブ色	
36	施釉陶器	椀	土坑3	10.4	5.8	4.5	浅黄橙色	明オリーブ灰色	
37	施釉陶器	蓋物 身	土坑3	8.6	5.0	7.0	灰白色	灰白色	
38	施釉陶器	鉢	土坑3	14.3	6.9	6.4	灰黄色	灰白色	三代目清風与平の落款である丸の中に「清山」の刻印
39	施釉陶器	鉢	土坑3	17.6	8.5	7.2	灰白色	灰白色	四代目清風与平の落款である丸の中に「清風」の刻印
40	施釉陶器	一輪挿し?	土坑3	幅 4.7	(12.1)	高さ (4.5)	灰白色	暗緑色	
41	施釉陶器	茶托	土坑3	3.9	6.0	4.6	灰白色	灰白色	
42	施釉陶器	灯明皿	土坑3	7.1	1.7	2.6	灰白色	淡黄色	
43	施釉陶器	灯明受皿	土坑3	6.6	1.1	2.7	灰白色	灰白色	
44	施釉陶器	灯明受皿	土坑3	11.3	2.2	4.2	灰白色	淡黄色	
45	施釉陶器	燈火具	土坑3	4.3	3.8	3.2	灰白色	灰白色	カンテラ
46	施釉陶器	急須 蓋	土坑3	5.9	(2.7)		灰白色	明緑色	
47	施釉陶器	急須 蓋	土坑3	5.5	2.1	2.0	にぶい黄橙色	にぶい赤褐色	
48	施釉陶器	仏飯器	土坑3	7.2	5.6	4.6	灰白色	灰白色	
49	陶胎漆器	酒器	土坑3	7.6	10.2	7.6	灰白色	暗赤褐色	型作りによる山水楼閣文
50	陶胎漆器	皿	土坑3		(2.0)		灰黄色	灰白色	内面に朱漆を塗り、銀彩で文様を描く
51	陶胎漆器	鉢	土坑3	16.6	9.6	8.0	灰白色	灰白色	内面に朱漆を塗り、金彩と黒色で花卉を描く
52	施釉陶器	仏花瓶	土坑3	12.6	15.4	9.6	灰白色	にぶい赤褐色	鉄釉
53	施釉陶器	仏花瓶	土坑3		(21.5)	12.6	灰白色	赤褐色	鉄釉
54	施釉陶器	仏花瓶	土坑3	26.8	(24.7)		灰白色	暗褐色	鉄釉
55	施釉陶器	徳利	土坑3		(20.9)	9.4	灰白色	灰褐色	鉄釉
56	施釉陶器	鍋	土坑3	20.1	11.8	9.4	にぶい黄橙色	暗赤褐色	鉄釉
57	染付	蓋	土坑3	9.4	2.7	5.0	灰白色		
58	染付	壺	土坑3	2.4	12.5	4.4	灰白色		
59	青磁	椀	土坑3	8.2	5.5	3.2	灰白色	明緑灰色	
60	焼締陶器	布袋徳利	土坑3		(14.0)	7.2	灰色	にぶい赤褐色	備前 菱形の中に「上」の刻印
61	施釉陶器	椀	土坑4	5.6	3.4	2.0	灰白色	灰白色	
62	施釉陶器	椀	土坑4	9.2	5.4	3.1	灰白色	灰白色	上絵
63	施釉陶器	椀	土坑4	12.2	4.7	3.9	灰白色	灰白色	
64	施釉陶器	椀	土坑4	8.5	6.0	4.0	灰白色	灰白色	上絵
65	施釉陶器	椀	土坑4	8.5	6.6	3.8	灰白色	(外) 黒褐色 (内) 浅黄色	「帯山」の刻印
66	施釉陶器	鉢	土坑4	12.3	9.1	11.3	灰黄色	にぶい黄色	型作り、梅花と梅枝を貼付け

番号	器種	器形	遺構・層名	法量(cm)			胎土の色調	釉の色調	備考
				口径	高さ	底径			
67	施釉陶器	花瓶	土坑4		(6.5)	3.8	灰白色	灰白色	
68	施釉陶器	仏飯器	土坑4	7.0	5.2	5.6	灰白色	浅黄色	
69	土師質土器	椀	現代層		(1.9)	2.8	にぶい黄橙色		施釉陶器の素地、 「古曽部」の刻印
70	土師質土器	椀	現代層		(4.5)	2.5	浅黄橙色		施釉陶器の素地、体部に草花文を へら描き、高台内に「安」とへら書き
71	土師質土器	椀	現代層	8.1	5.1	3.8	浅黄橙色		施釉陶器の素地、 「五郎介」の刻印
72	土師質土器	德利	現代層	1.4	8.8	2.8	灰白色		
73	施釉陶器	猪口	現代層	4.3	5.4	2.5	灰白色	灰白色	
74	施釉陶器	猪口	現代層	4.5	4.4	2.6	灰赤色	白色	三島手、 小判形の中に「五郎介」の刻印
75	施釉陶器	椀	現代層	8.9	3.8	4.8	灰白色	灰白色	「五郎介」の刻印
76	施釉陶器	椀	現代層	7.9	6.0	3.6	灰白色	灰白色	五角形の中に「五郎介」の刻印
77	施釉陶器	椀	現代層	11.7	4.8	4.3	灰色	灰白色	三島手、 五角形の中に「祥瑞五郎介」の刻印
78	施釉陶器	椀	現代層	11.4	7.2	6.1	灰白色	灰白色	五角形の中に「五郎介」の刻印
79	施釉陶器	皿	現代層	10.0	2.7	4.1	灰白色	灰白色	
80	施釉陶器	椀	現代層	7.1	3.2	4.2	灰白色	灰白色	三島手
81	施釉陶器	椀	現代層	6.4	2.8	2.7	にぶい黄橙色	灰白色	「嶂山」の刻印
82	施釉陶器	壺	現代層		(1.4)	6.1	灰褐色	白色	三島手、 丸の中に「亀水」の刻印
83	施釉陶器	急須 蓋	現代層	3.7	1.7		灰白色	淡黄色	
84	施釉陶器	蓋	現代層		(2.7)		灰黄色	灰白色	「五郎介作」と鉄釉で記す
85	染付	椀	現代層	6.6	4.3	2.6	灰白色	灰白色	
86	染付	椀	現代層	7.2	4.8	3.4	灰白色	灰白色	「洛東鳳瑞」と記す
87	染付	椀	現代層	6.9	4.7	3.3	灰白色	灰白色	「直阿製也」と記す
88	染付	急須 蓋	現代層	7.2	2.2		灰色	白色	「洛東鳳瑞」と記す
89	磁器	瓶 蓋	現代層	2.0	3.4			白色	

表4 窯道具観察表

番号	種類	器形	遺構・層名	法量(cm)			胎土の色調	釉の色調	備考
				長さ	幅	厚さ・高さ			
90	窯道具	匣鉢	土坑2	口径 6.4	底径 5.4	4.0	灰黄色		丸形平底孔開き
91	窯道具	匣鉢	土坑1	口径 19.0	底径 17.8	13.0	にぶい黄色		刻印あり
92	窯道具	匣鉢	土坑2	口径 18.4	底径 18.2	12.6	浅黄色		「一十」とへら書き
93	窯道具	匣鉢	土坑3上部 整地層	35.7	21.8	9.9	にぶい橙色		角形平底
94	窯道具	匣鉢	現代層	口径 9.2	底径 9.2	6.4	黄灰色		丸形平底、底部に輪トチン付着
95	窯道具	匣鉢	現代層	口径 15.2	底径 14.7	6.9	にぶい黄橙色		丸形平底、 山形の下に「五」と鉄釉で記す
96	窯道具	匣鉢	現代層	口径 17.4	底径 17.3	8.9	にぶい黄橙色		丸形平底
97	窯道具	匣鉢	現代層	口径 14.6	底径 15.0	4.6	にぶい橙色		丸形平底、小孔多く開く、 瓶の蓋焼成用
98	窯道具	匣鉢	暗渠排水溝	口径 12.0	底径 5.5	8.7	にぶい黄橙色		丸形丸底、 「アサミ」と鉄釉で記す
99	窯道具	匣鉢	現代層	口径 14.4	底径 7.0	7.2	にぶい黄橙色		丸形丸底、 山形の下に「政」と鉄釉で記す
100	窯道具	匣鉢	現代層	30.1	22.2	10.5	灰白色		角形平底、 「あさみ」と鉄釉で記す
101	窯道具	匣鉢蓋	現代層	上部径 5.1	下部径 9.5	1.7	にぶい黄橙色		
102	窯道具	匣鉢蓋	土坑3上部 整地層	径 9.4		1.3	灰黄褐色		「キテ」とへら書き
103	窯道具	匣鉢蓋	土坑3上部 整地層	径 16.6		2.1	にぶい褐色		円盤状ハマ2箇所付着
104	窯道具	匣鉢	土坑1		底径 19.6	(11.5)	にぶい黄褐色		丸の中に不明文字の刻印
105	窯道具	匣鉢	土坑2	口径 17.8	底径 17.6	11.6	にぶい黄褐色		○を1つ刻印
106	窯道具	匣鉢	土坑2	口径 16.0	底径 16.4	12.3	にぶい黄褐色		○を2つ刻印
107	窯道具	匣鉢	土坑2	口径 18.6	底径 19.4	11.9	にぶい黄褐色		○を4つ刻印
108	窯道具	匣鉢	土坑4	口径 21.0	底径 19.4	11.5	にぶい黄褐色		「イ」とへら書き
109	窯道具	円盤状ハマ	土坑1	径 4.0		0.5	灰黄色		
110	窯道具	円盤状ハマ	土坑1	径 5.4		0.7	灰黄色		
111	窯道具	円盤状ハマ	土坑1	径 6.2		0.9	にぶい褐色		
112	窯道具	円盤状ハマ	現代層	径 4.2		0.2	灰白色		
113	窯道具	円盤状ハマ	現代層	径 5.9		0.5	にぶい黄橙色		
114	窯道具	円盤状ハマ	現代層	径 7.6		0.4	にぶい黄橙色		
115	窯道具	円盤状ハマ	現代層	径 3.7		0.7	灰白色		
116	窯道具	円盤状ハマ	現代層	径 7.1		1.3	灰白色		
117	窯道具	円盤状ハマ	現代層	径 6.4		1.6	灰白色		
118	窯道具	円盤状ハマ	現代層	径 9.3		0.8	灰白色		
119	窯道具	輪トチン	土坑1	径 6.0		0.8	にぶい黄褐色		
120	窯道具	輪トチン	土坑1	径 7.5		1.0	にぶい黄褐色		
121	窯道具	輪トチン	土坑1	径 10.0		1.3	にぶい褐色		
122	窯道具	輪トチン	土坑1	径 4.9		0.9	灰褐色		

番号	種類	器形	遺構・層名	法量(cm)			胎土の色調	釉の色調	備考
				長さ	幅	高さ・高さ			
123	窯道具	輪トチン	土坑1	径 6.2		1.7	にぶい赤褐色		
124	窯道具	輪トチン	土坑1	径 8.0		2.0	にぶい褐色		
125	窯道具	輪トチン	現代層	径 4.4		1.2	灰白色		
126	窯道具	輪トチン	現代層	6.5	5.8	1.5	灰黄褐色		
127	窯道具	輪トチン	現代層	径 5.9		2.5	浅黄色		
128	窯道具	筒形トチン	土坑1	口径 4.0	底径 4.1	2.9	にぶい赤褐色		
129	窯道具	トチン	現代層	3.9	3.7	2.1	淡黄色		
130	窯道具	トチン	現代層	5.7	5.3	4.1	にぶい褐色		
131	窯道具	トチン	現代層	3.8	(3.1)	2.9	灰白色		
132	窯道具	耐火度試験 道具	現代層	4.1	3.8	5.3	にぶい黄橙色		磁器のツメ
133	窯道具	円錐ピン	土坑1	底径 1.3		1.1	にぶい赤褐色		
134	窯道具	円錐ピン	土坑1	底径 1.8		1.3	にぶい橙色		
135	窯道具	円錐ピン	土坑1	底径 1.3		2.9	にぶい橙色		
136	窯道具	ツク	現代層		3.6	5.5	にぶい褐色		
137	窯道具	ツク	現代層		6.5	14.4	にぶい黄橙色		丸の中に「ツ」の刻印
138	窯道具	クレ	現代層	径 9.6		19.0	淡橙色		円柱状
139	窯道具	クレ	現代層	11.9	9.3	21.1	にぶい橙色		三角柱状
140	窯道具	棚板	胴木間	(32.7)	29.3	3.4	灰黄褐色		
141	窯道具	錦窯	土坑4	口径 32.4	底径 31.4	27.5	暗赤褐色		内窯

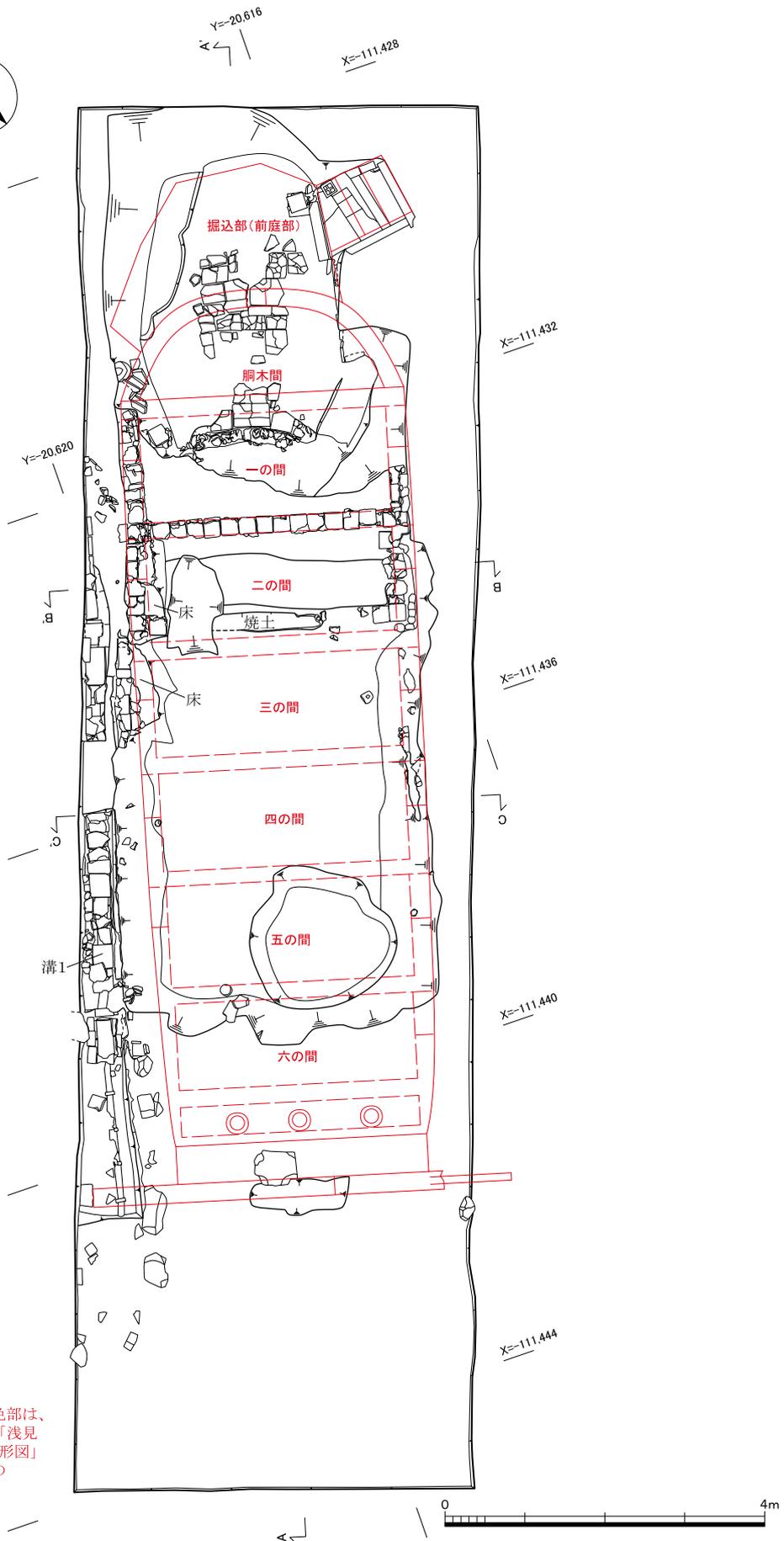
表5 その他の遺物観察表

番号	種類	器形	遺構・層名	法量(cm)			胎土の色調	釉の色調	備考
				長さ	幅	厚さ・高さ			
142	土製品	土型 泥面子	現代層	径 4.0		1.2	にぶい橙色		渦巻文
143	土製品	土型	土坑1	口径 7.6		4.9	灰白色		
144	土製品	土型	土坑3	口径 7.8		2.1	浅黄橙色		
145	土製品	土型 亀の甲羅	現代層	7.2	7.1	2.3	浅黄橙色		
146	土製品	土人形 馬	土坑2	(17.2)	(6.8)	(10.4)	褐灰色		
147	土製品	土人形 鳩	土坑2	(6.5)	3.1	(2.5)	灰白色		
148	土製品	ミニチュア 瓢箪	土坑2	2.4		4.7	灰白色		
149	土製品	ミニチュア 施釉陶器 播鉢	現代層	口径 6.0	底径 2.9	2.1		褐色	「嶂山」の刻印
150	土製品	ミニチュア 箱庭道具	現代層	(10.9)	(9.5)	4.6	灰白色		
151	土製品	テストピース 施釉陶器	現代層		(3.1)	3.5	灰白色	灰白色	仕上がり時の釉薬の色を見るための道具、外面に「五条坂」、内面に「京中市」と呉須で記す
152	土製品	テストピース 染付	現代層	4.4	2.3	2.2	灰白色	灰白色	仕上がり時の釉薬の色を見るための道具、格子文などの文様を呉須で描く
153	土製品	テストピース 施釉陶器	土坑4	幅 6.0	3.9	2.5	灰白色	灰白色	仕上がり時の釉薬の色を見るための道具、「並石含メ二百〇ヲ四分入ル」と鉄釉で記す
154	土製品	台?	土坑2		底径 4.6	1.4	灰白色		施釉陶器鉢の底部を削り取って再利用、ハート形の刻印
155	土製品	施釉陶器 電熱器 皿	現代層	径 13.6		2.0	灰白色	黄褐色	
156	土製品	磁器 乳棒	現代層	39.0	最大径 7.6	最小径 4.8	白色	灰白色	入江道仙窯の製品
157	土製品	磁器 メダル	現代層	径 7.0		1.0	白色	白色	第24回全国中等学校野球大会参加章
158	土製品	施釉陶器 陶板(タイル)	現代層	15.0	14.5	1.0	灰白色	灰白色	上絵付、小判形の中に「五郎介」の刻印
159	土製品	施釉陶器 陶板(タイル)	現代層	一辺 14.8		0.9	灰白色	灰白色	上絵付
160	土製品	土師質 ボタン	現代層	径 3.0		0.8	灰白色		
161	土製品	磁器 装飾品?	現代層	3.8	2.8	0.6	灰白色	明緑灰色	「五郎介」の刻印
162	金属製品	銅製 簪	土坑2	14.4	0.5	0.2			鍍金、重さ7.0g
163	金属製品	銅製 吊手	土坑2	7.4	4.8	0.2			重さ4.2g
164	金属製品	鉄製 鍬	江戸時代包含層	25.2	12.1	0.4			
165	銭貨	寛永通寶	土坑2	径 2.1		0.1			
166	銭貨	寛永通寶	土坑3	径 2.3		0.1			
167	骨製品	柄?	土坑2	5.6	1.2				

圖 版



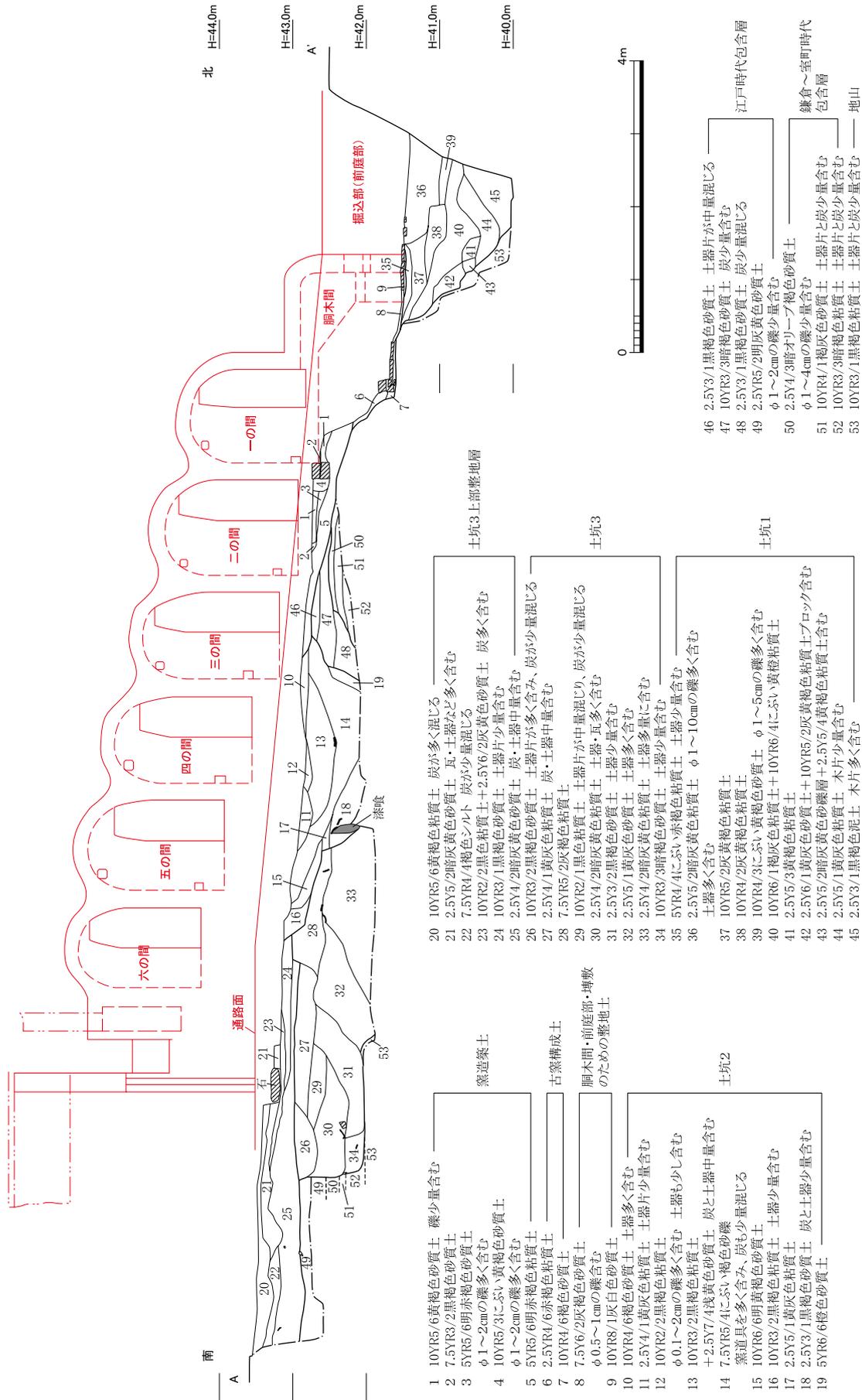
窯跡オルソ画像 (1 : 80)

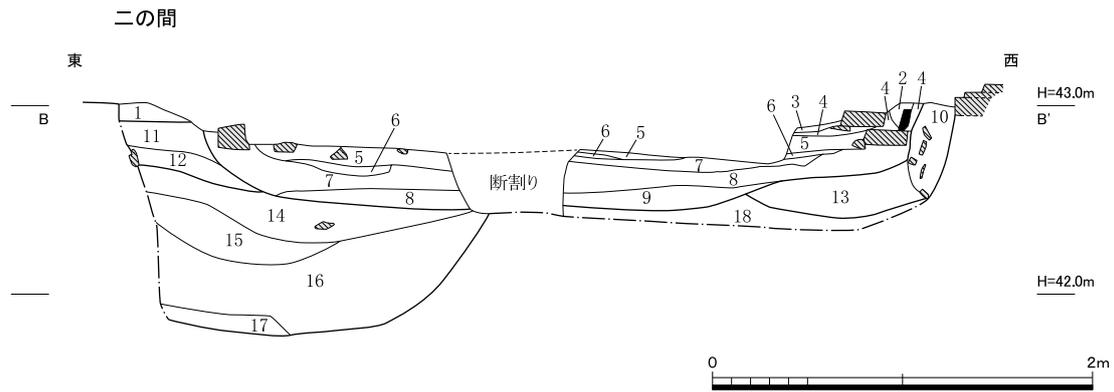


※ 図版2・3・5の赤色部は、
一島政勝氏作成の「浅見
五郎助邸登り窯 外形図」
を重ね合わせたもの

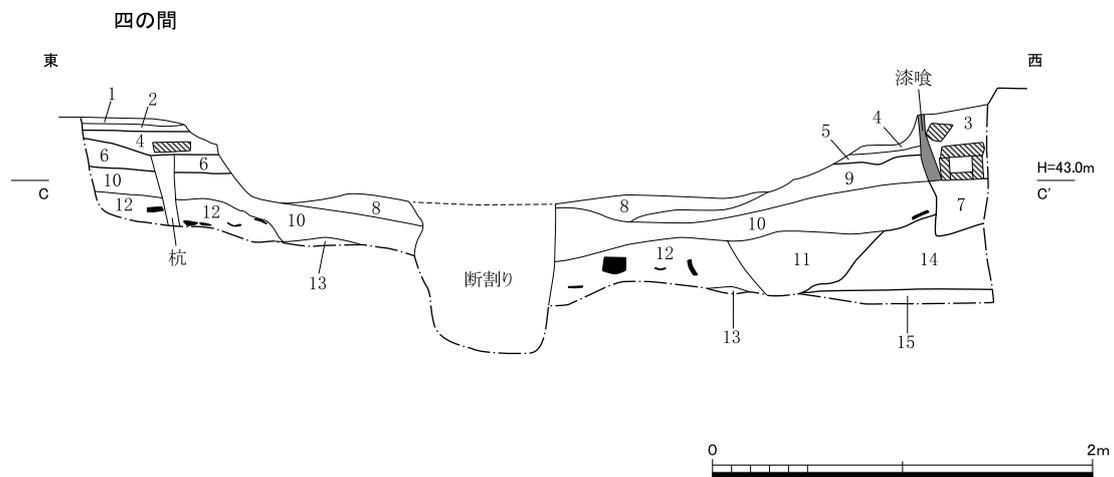
調査区平面図 (1 : 80)

中央断割り断面図 (1 : 80)



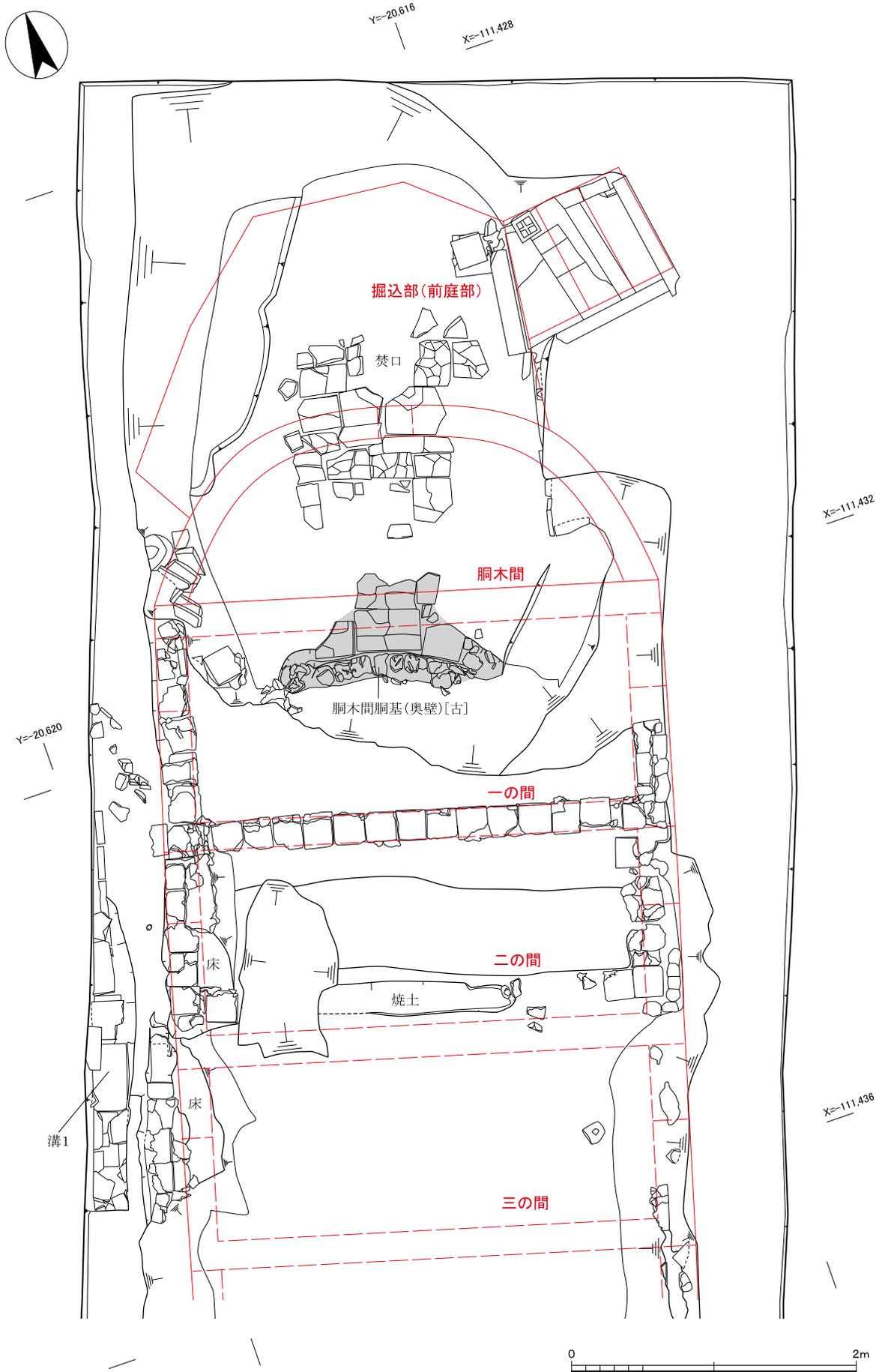


- | | | | |
|----|-------------------|------------------------------|---------|
| 1 | 10YR3/3暗褐色粘質土 | φ 1~2cmの礫含む | 現代盛土 |
| 2 | 7.5YR3/1黒褐色砂質土 | | 窯造築土 |
| 3 | 7.5YR3/2黒褐色砂質土 | | |
| 4 | 5YR5/8明赤褐色砂質土 | | |
| 5 | 10YR5/6黄褐色砂質土 | 礫少量含む | |
| 6 | 10YR6/6明黄褐色砂質土 | | |
| 7 | 5YR5/6明赤褐色粘質土 | φ 1~2cmの礫多く含む | 土坑4 |
| 8 | 5YR5/6明赤褐色粘質土 | | |
| 9 | 10YR5/6黄褐色砂質土 | φ 1~2cmの礫少量含む | |
| 10 | 2.5Y3/1黒褐色砂質土 | | |
| 11 | 10YR3/2黒褐色粘質土 | φ 1~3cmの礫多く含む | 室町時代包含層 |
| 12 | 10YR3/4暗褐色粘質土 | +10YR5/6黄褐色砂質土 φ 1~2cmの礫多く含む | |
| 13 | 2.5YR5/2明灰黄色粘質土 | φ 1~2cmの礫少量含む | |
| 14 | 10YR3/2黒褐色粘質土 | φ 1~2cm少量含む、土器を少量含む | |
| 15 | 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土 | | |
| 16 | 10YR4/1褐灰色粘質土 | 炭を少量含む φ 1~2cmの礫多く含む | |
| 17 | 2.5YR4/1黄灰色粘質土 | φ 1~4cmの礫含む | |
| 18 | 2.5Y4/3暗オリーブ褐色砂質土 | φ 1~4cmの礫少量含む | |



- | | | | |
|----|-------------------|-------------------------|---------|
| 1 | 2.5Y5/2暗灰黄色砂質土 | | 現代盛土 |
| 2 | 2.5Y7/3浅黄色砂質土 | | 溝1 |
| 3 | 2.5Y3/1黒褐色砂質土 | 土器・炭少量含む | |
| 4 | 2.5YR4/4にぶい赤褐色砂質土 | | 窯造築土 |
| 5 | 7.5YR4/4褐色砂質土 | | |
| 6 | 10YR3/2黒褐色砂質土 | 土器少量含む | 土坑2 |
| 7 | 2.5Y3/1黒褐色砂質土 | | |
| 8 | 10YR4/6褐色砂質土 | 土器多く含む | |
| 9 | 10YR3/1黒褐色粘質土 | 土器片・炭少量含む | |
| 10 | 10YR3/2黒褐色粘質土 | +2.5Y7/4浅黄色砂質土 炭と土器中量含む | |
| 11 | 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土 | 土器片・炭少量含む | |
| 12 | 7.5YR5/4にぶい褐色砂礫 | 窯道具を多く含み、炭も少量混じる | |
| 13 | 5YR3/6暗赤褐色砂質土 | | 江戸時代包含層 |
| 14 | 2.5YR5/2明灰黄色粘質土 | φ 1~2cmの礫多く含む | |
| 15 | 2.5Y4/3暗オリーブ褐色砂質土 | φ 1~4cmの礫少量含む | 室町時代包含層 |

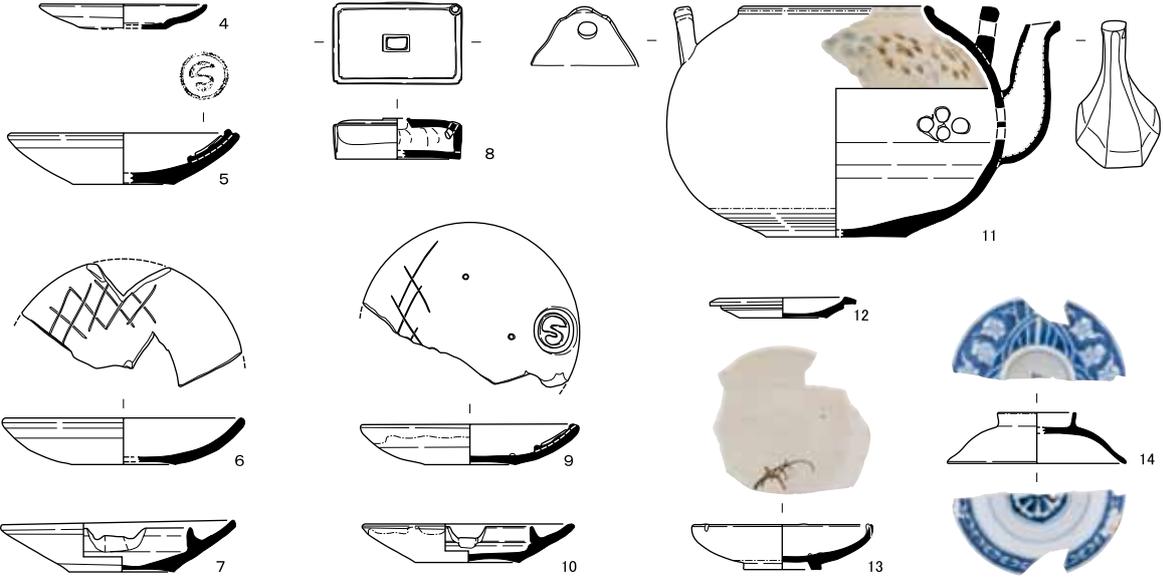
二の間・四の間の断割り断面図 (1 : 40)



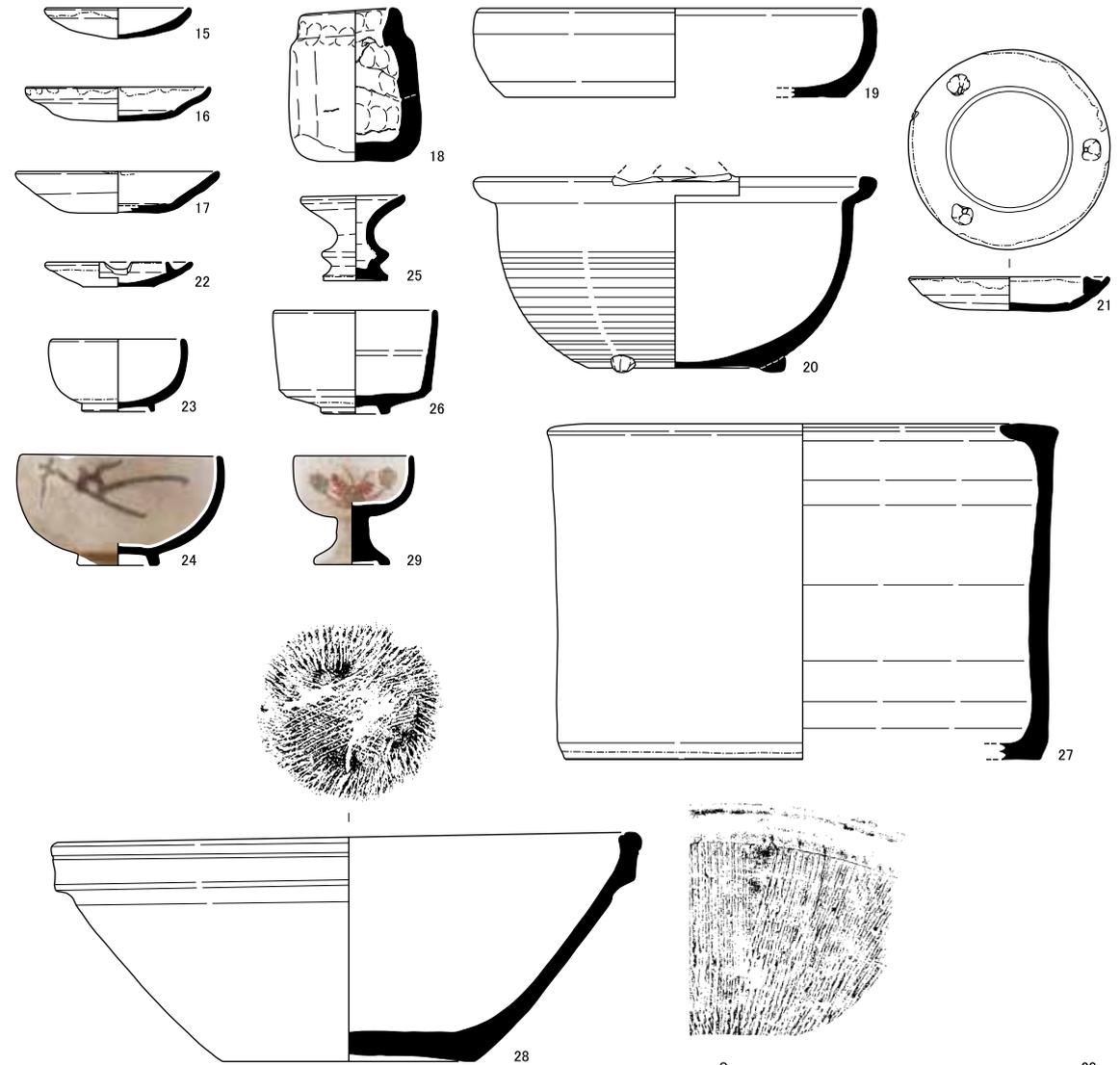
調査区北半平面図 (1 : 40)

图版6
遺構

土坑1



土坑2



土器実測図1 (1:4)

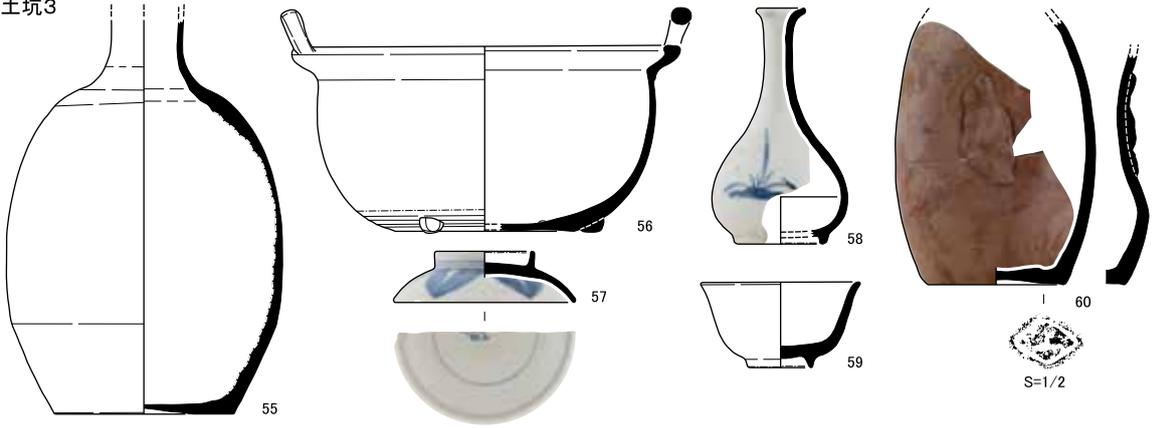
土坑3



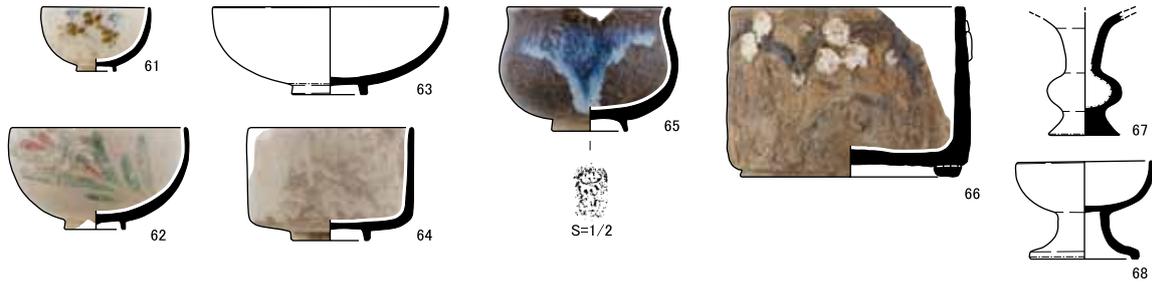
土器実測図2 (1:4)

図版8
遺物

土坑3



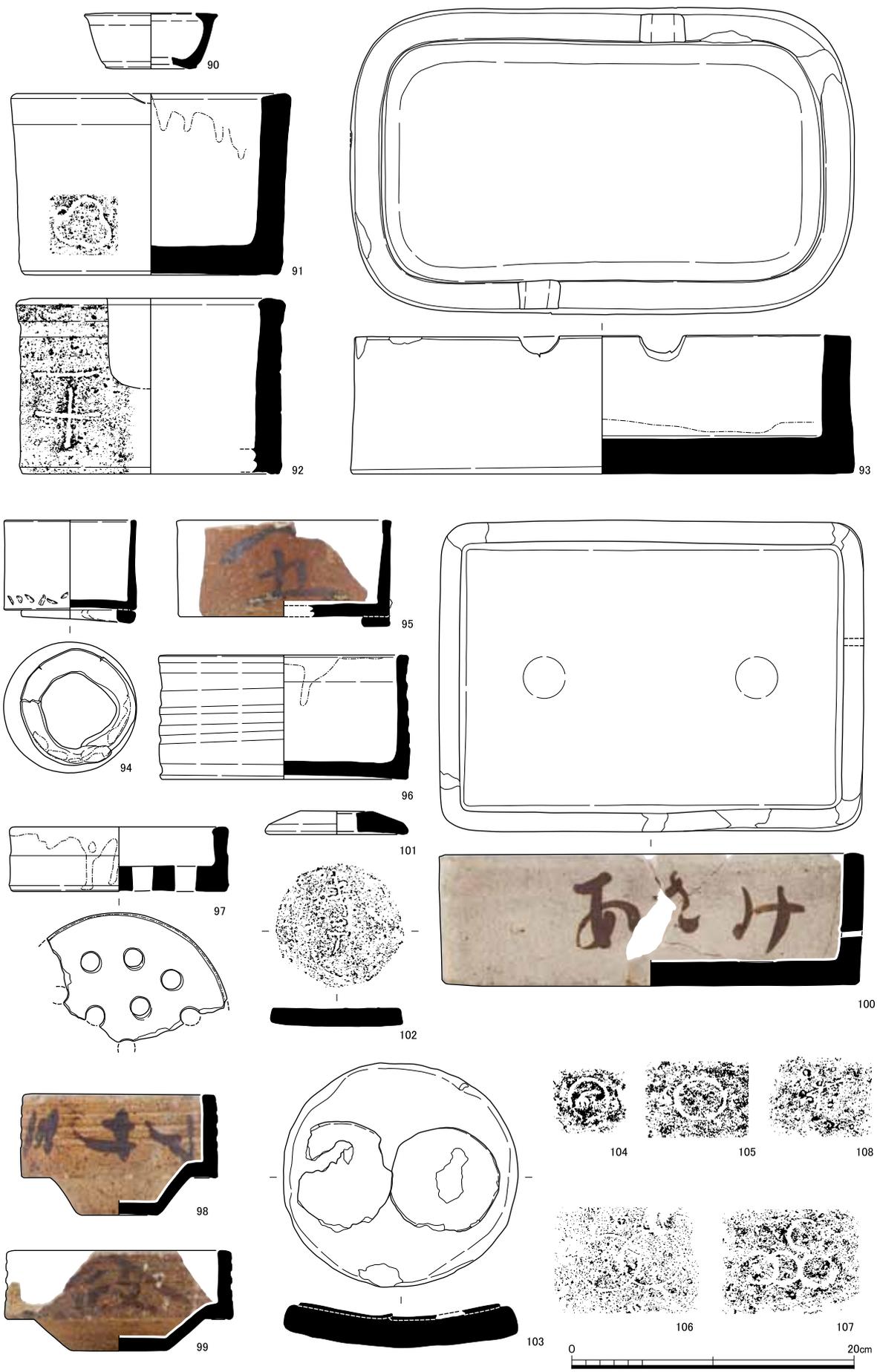
土坑4



現代層

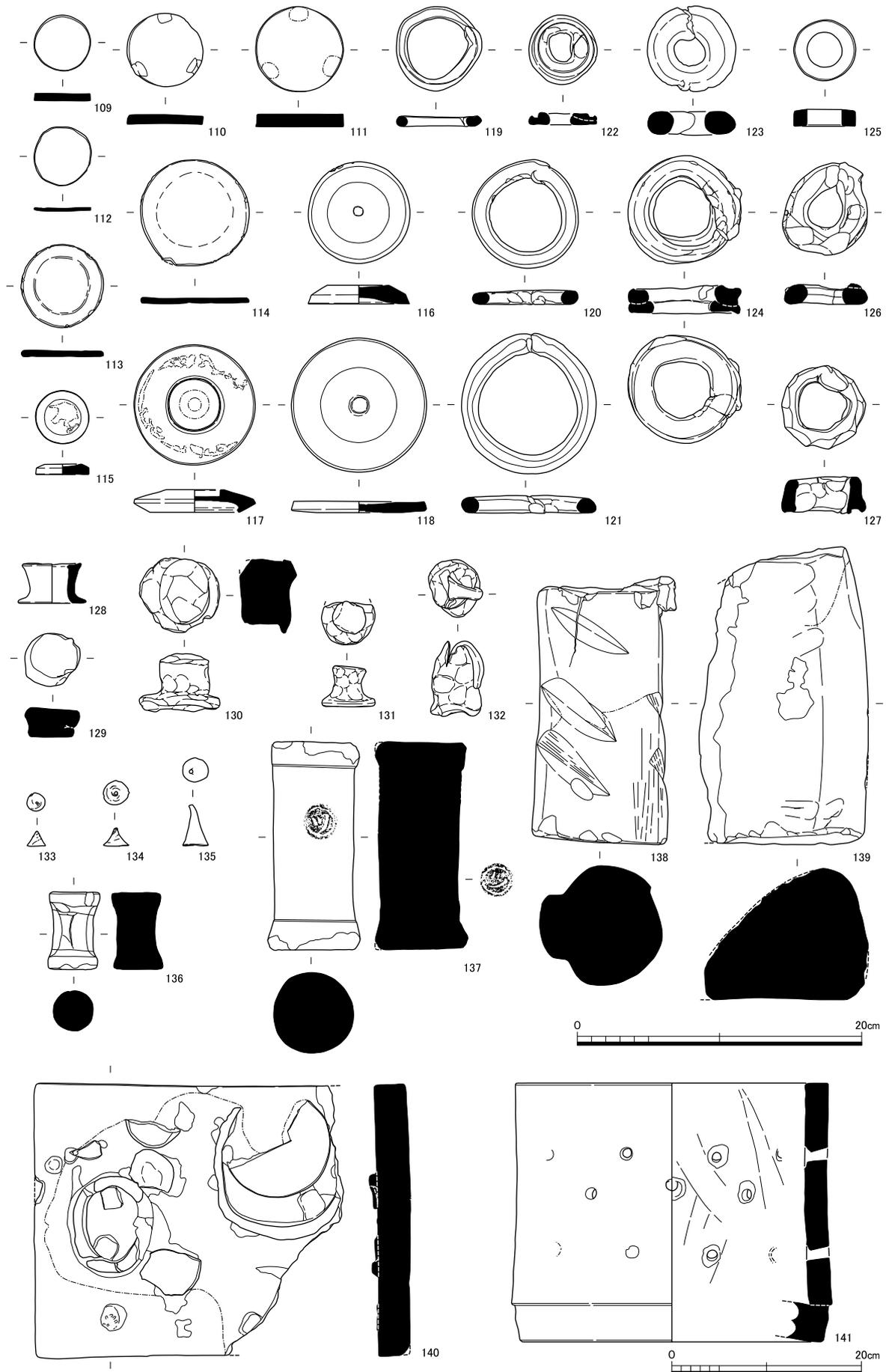


土器実測図3 (1:4)

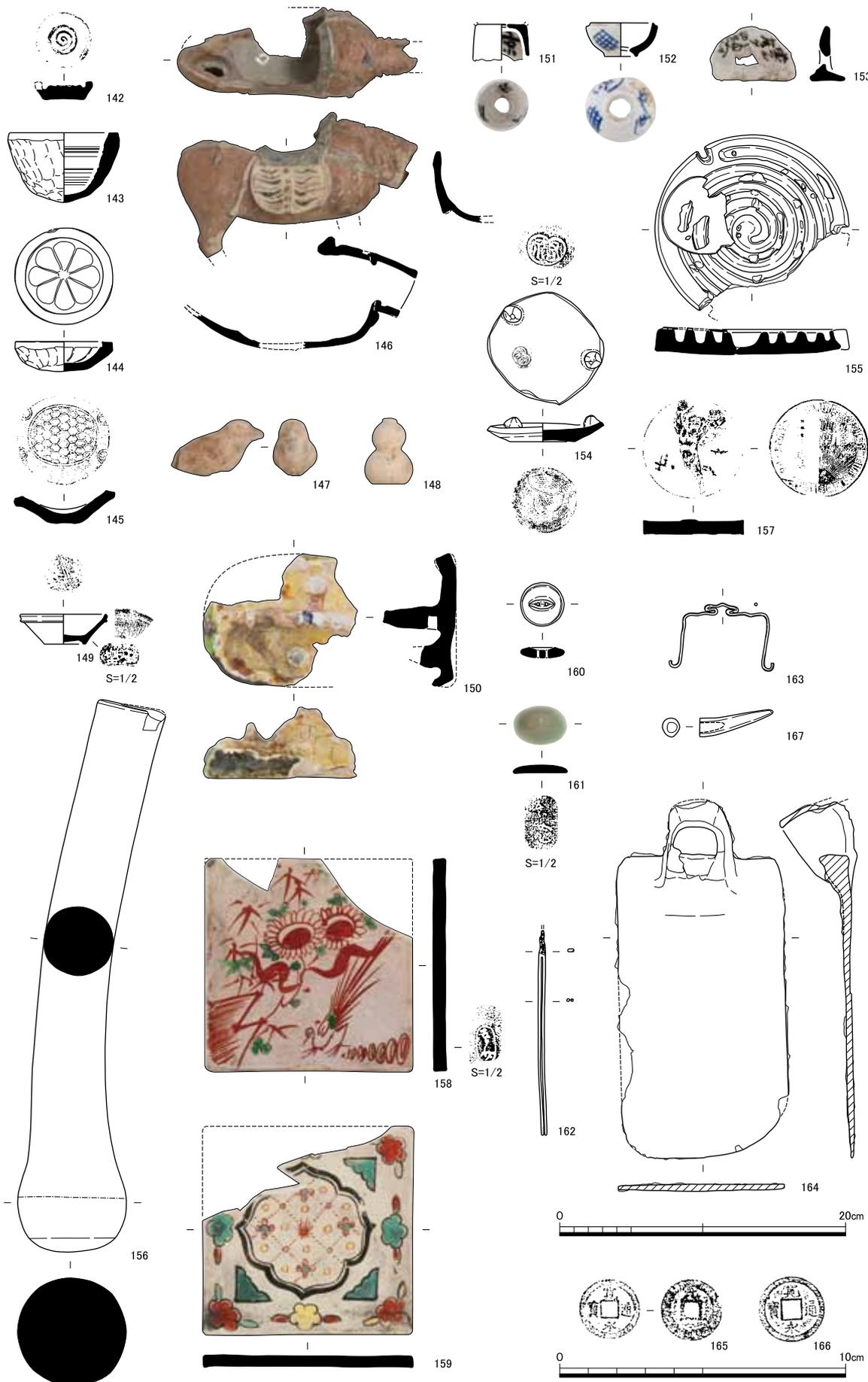


窯道具実測図1 (1 : 4)

図版10
遺物



窯道具実測図2 (1 : 4、140・141のみ1 : 6)



その他の遺物実測図（1：4）、銭貨拓影（1：2）



1 壊される前の浅見五郎助窯（北東から） ※ 立命館大学の木立雅朗教授より提供を受けた



2 調査区全景（北から）



1 浅見五郎助窯基底部全景（北から）



2 溝1検出状況（北から）



3 溝1下部（北から）



1 洞木間 (北から)



2 洞木間 炎道 (北から)



3 一の間 西側壁 (北東から)



4 一の間 東側壁 (北西から)



5 二の間 東側壁 (北西から)



6 三の間 西側壁基底面 (北東から)



土器類、窯道具 1



窯道具2、その他の遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	おとわ・ごじょうざかかまあと（あさみごろすけがま）							
書名	音羽・五条坂窯跡（浅見五郎助窯）							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2018-1							
編著者名	木下保明							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2018年8月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おとわ・ごじょうざか 音羽・五条坂 かまあと 窯跡	きょうとしひがしやまく 京都市東山区 ごじょうぼしひがしよんちようめ 五条橋東4丁目	26100	565	34度 59分 43秒	135度 46分 27秒	2018年3月 26日～2018 年4月12日	87.5㎡	ホテル建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
音羽・五条坂 窯跡	窯跡	鎌倉時代 ～室町時代		土師器、須恵器、瓦器、 輸入青磁		胴木間は浅見五郎 助窯の一の間と重 なっており、一時 期古い窯のもので ある可能性がある。		
		幕末～ 明治時代初期	土坑	土師器、土師質土器、 施釉陶器、染付、窯道 具、瓦、土製品、金属 製品、銭貨				
		明治時代	土坑	土師器、土師質土器、 施釉陶器、軟質施釉陶 器、陶胎漆器、染付、 磁器、焼締陶器、窯道 具、埴、瓦、土製品、 金属製品、骨製品				
		明治時代末期 ～現代	浅見助五郎窯、溝	土師質土器、施釉陶器、 染付、磁器、窯道具、 土製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2018-1
音羽・五条坂窯跡（浅見五郎助窯）

発行日 2018年8月31日

編集行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961